

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



御 傳 鈔 中 澤 見 明

御
傳
鈔

中
澤
見
明

目次

第一章 序 説……………三
第二章 御傳鈔の成立とその造意……………六
第三章 聖人高德の讃仰……………一〇
第四章 眞宗教義の説示……………一九
第五章 聖人略傳の選述……………三三
 第一節 壯年時代の聖人……………三三
 第二節 東國時代の聖人……………四七
 第三節 歸洛後の聖人……………四七
第六章 總 結……………六五

第一章 序 説

御傳鈔は眞宗では毎年宗祖親鸞聖人の御祥忌報恩講にそれを讀むことが、古來その儀式となつて居るのである。此御傳鈔讀誦を聽聞するだけでも、何んとなき崇仰の感にうたれて、おのづから報恩謝徳の念が湧いてくるやうに思はれるところの靈作であつて、眞宗の最も重要な聖典の一つである。此御傳鈔と云ふのは、その内容は上卷が八段、下卷が七段に分たれ、卷首には「本願寺聖人親鸞傳繪」と題せられて居る。此聖典は本願寺の教義相承では三代目に當る覺如上人の選述せられたものであつて、その最初作られたものは、その内容各一段毎に詞書とその後繪が添加せられてあつたのである。それで「本願寺聖人親鸞傳繪」と云ふ題號が設けられたのであるが、後に繪だけは懸軸として一般の拜覽に便ならしめ、詞書のみを別冊として御傳鈔と呼ぶやうになつたのである。初めは詞書と繪とを合せて作られた個人的、或は少人數向の親鸞傳繪が後に本文と繪とを分離して大衆向に發展せしめられ、繪は懸軸となつて御繪傳と稱し、本文を別冊として御傳鈔と云つたのであるが、私は本書第二章に於ては、先づ御傳鈔の成立と、その造意に就いて少しく述べることにした。而してその御傳鈔の内容を窺ふに就いては三つの見方がある。それは御傳鈔と殆んど同じところに同じく覺如上人の作られた報恩講式に、親鸞聖人の

三徳を擧げて、第一に眞宗興行の徳、第二に本願相應の徳、第三に滅後利益の徳を、述べるといつて三徳をおのの區別して三段に記して居られるので、御傳鈔は「本願寺聖人親鸞傳繪」と題せられ、親鸞聖人御一代の行狀を記すことを、表面の題目として居られるけれども、その選述の意は報恩講式と同様に聖人の三徳を述べられたものである。しかし御傳鈔はその三徳を合採して、その全文を構成せられてゐるのであるから、その内容を窺ふにも三徳各別の方面からそれを拜見せなければならぬ、それで私は此三つの方面から御傳鈔の内容を窺ふこととした、即ち本書第三章に於て御傳鈔は聖人權化の高徳を讃仰してその衆生利益を述べられたものとしてその内容を説明することとした。これは報恩講式第三の滅後利益の徳を述すとあるものに相當するものである。次に第四章に於ては、御傳鈔は眞宗の教義を示されたものとしてそれを窺ふこととした。これは報恩講式の本願相應の徳を數すとあるものに相當するのである。而して第五章に於て御傳鈔はその題號の如く聖人一生の行狀を記されたものとしてそれを窺ふこととした。これは報恩講式の「第一に眞宗興行の徳を讚す」とあるものに相當するのであるが、その作者覺如上人は、此御傳鈔に於ても、報恩講式と同様に親鸞聖人の三徳をその全文の上に表現しやうとせられたから、單にそれが聖人の御傳記としてはその記述の次第も不同である、またその記事に於ても甚しく略述せられてあるから私は此御傳鈔を中心とし、それに他の史料を参考して、聖人の第一生をその壯年時代と東國時代及び歸洛後の三期に分つて少しく述べることにした。但し聖人の御事蹟に就いては、この限りある紙面に於て詳述することは出来ないが、茲にはたゞ御傳鈔講讀の意味に於て聖人御一生の信仰生活を略述することとしたまでである。

第二章 御傳鈔の成立とその造意

御傳鈔は親鸞聖人滅後三十三年覺如上人二十六歳の時に選述せられたものである。（纂歸繪詞と云ふ覺如上人の傳記によると、）

永仁三歳の冬應鐘中甸の候にや、報恩謝徳のためにとて、本願寺聖人の御一期の行狀を草案し、二卷の縁起を圖畫せしめしより以來、門流の輩遠邦も近郭も崇て賞翫し、若齡も老者も書かせて案置す

とあつて、既に御傳鈔はその作者覺如上人在世中に、眞宗親鸞聖人の門徒の間に流行して、それを寫し傳へたものが非常に多くあつたやうに思はれる。今西本願寺に傳つて居るところの御傳鈔の詞書と繪とを合せた古本の卷物は覺如上人と殆んど同じ時代の、淨土宗の向福寺琳阿といふ人が一時それを手に入れて秘藏して居たものが、後にまた本願寺の所藏となつたのであるが、その詞書の文句は他の御傳鈔の文とは大分異つて居るところがある、その題號も「善信聖人繪」とあり、その詞書の文體から考へても、これは覺如上人の御草稿のままのものを傳へた古本であらうと思はれる。而してその奥書の末尾には

干レ時永仁第三曆、應鐘中甸第二天、至ニ哺時、終ニ草書之篇ヲ訖

桑門覺如草之

と記してある。この奥書によれば覺如上人は、永仁三年十一月十二日申刻即ち今日の午後四時ごろに至つて、此詞書を書きあげられたといふのである。親鸞聖人の入滅は弘長二年十一月二十八日であるから、それから三十三年目の御祥月二十一日から二十八日まで一七日の報恩講勤修の少し前にその草稿を終へられたのである。覺如上人が大體御傳鈔の草稿を終へられたのは十一月十二日のことであるからその月の報恩講までには幾度も文章の改訂を加へられ、大谷廟堂の報恩講にまいつた東國門徒等の中に披露せられたものと思はれる、此西本願寺所藏の古本のほかに高田派の専修寺に傳つて居る古本があるが、それは西本願寺の古本と同じ「永仁第三曆、應鐘中甸第二天、云々」と云ふ奥書の後に、別に

令ニ同歲、大呂仲甸第三天、又書之

と追記してある。これは同じ年の十二月十三日にまたこれを書かしたと記してあるから、高田専修寺の古本はその年の十一月報恩講の翌十二月十三日に書寫せしめられたものである。これも本願寺のと同じやうに詞書と繪とを合せた卷物になつてゐるものであるが、初めに「善信聖人親鸞傳繪」と題してある、しかしその詞書の文體は後に寫された他の諸本と大きな相異はないから、西本願寺の古本に較べて考へると、清書の本から寫されたものと思はる。私は先年専修寺の古本を見せてもらつたが、その筆跡は覺如上人の書かれたものではなかつた、そうし

て其奥書の追記にも又これを書か令めるとしてあるから覺如上人が何人かに命じて寫さしめられたものであるが西本願寺のは草稿から寫された古本であり、専修寺のは清書本から寫したものである。この専修寺の古本には同年十二月十三日に又これを寫さしめるとあるから、下野高田の門徒がその御傳鈔のできた永仁三年十一月の報恩講に上洛して、その一本を覺如上人にお願ひしてその翌月十三日に、その詞書と繪とが完成するのを待つて、それを下野高田に持ち歸つたのが今の専修寺に傳つてゐる横卷の古本であらうと思はれる。また東本願寺には康永二年十一月十二日に書いたといふ奥書のある横卷の古本が傳はつてゐる。その本には「先年愚草の後一本所持の處に、世上鬪亂の間炎上の刻きま、焼失行方しれず、而して今たま／＼荒本を得てこれを注し留める」と追記してある。存覺上人の一期記によると、此康永二年より八年前の建武二年覺如上人留守中に大谷の本願寺が焼失したとあるから、この頃に覺如上人の手控の舊本は紛失したものと思はれる。それで再び寫し取つて置かれたのが、今東本願寺に傳つてゐるところの古本であると考へられる。また千葉縣大原願寺に康永三年十一月覺如上人七十五歳の時に「本願寺親鸞聖人傳繪」といふ外題だけを眞筆で書かれた横卷の古本が傳つて居る。斯様に覺如上人の在世中に寫し傳へられた確かな古本が、今日に至るまで多く遺つてゐることから考へても、此祖徳讚仰に努められた御傳鈔が眞宗初期に於て、如何にその門流の間に喜ばれてゐたかといふことが認められる。また詞書と繪とを別立せられた懸繪傳の中にも、その札銘の文字が存覺上人の書かれた古い御繪傳にもあり、覺如上人或は存覺上

人以後横卷御傳繪の寫本と共に懸繪傳を安置する門徒が多くあつて、今日に至るまでその古畫の御繪傳が随分諸方に遺つて居る。同時にその詞書だけを別にした御傳鈔も古くから、その末徒の間に尊重せられ、盛んに讀誦せられ、これによつて親鸞聖人の高德を仰ぐ一面に、その信仰思想の普及に大きな力を與へられたのである。即ち御傳鈔は單に親鸞聖人御一生の傳記としてのみそれを窺ふものではなく、此全卷を通して親鸞聖人の教義信仰を説き示された、淨土眞宗の重要な聖典として味ふべきものである。

第三章 聖人高德の讃仰

御傳鈔はたゞ親鸞聖人御一代の形似の上にあはれた御傳記だと見るべきものではない。この御傳鈔を作られた覺如上人の出られた頃、鎌倉時代から室町時代にかけて、いろ／＼の物語の繪に詞書を添へた繪卷物が作られ、それが今日まで遺されて、諸寺諸社各家に秘藏せられてゐるものが随分多くあるが、その中には戦争に關する繪卷物もあり、さまざまの人間の思想や信仰を繪卷物にあはしたものもあり、或は歌の意味を繪にあはしたのもあつた。また高僧の事蹟を記しそれに繪を加へた繪傳も随分多く作られて居る。此繪傳の類には、聖徳太子繪傳、一遍聖人行狀繪傳、法然上人傳等があり、殊に法然上人傳には四十八卷傳といふやうな大部のものもある。こゝろいふ時代に出られた覺如上人はまた親鸞聖人傳繪を作られたのであるが、上人は單に親鸞聖人御一生の傳記を作るといふことのみがその主なる目的ではなく、祖師親鸞聖人に對する信仰と淨土眞宗の教義とをその傳記に寄せて述べられたものである。そゝいふことは御傳鈔の記事の配置によつても覺如上人のお心もちが窺はれるのである。

御傳鈔は上巻が八段下巻が七巻に分けられてゐるが、その配置は一般の傳記のやうにその記事が年代の順を追つて載せてないのである。いまここにその配置の次第を列記すると次のやうである。

上 卷 (通計八段)

- 第一段 出家得度、聖人 九歳。
- 第二段 吉永入室、聖人二十九歳。
- 第三段 六角夢想、聖人二十九歳、或は三十一歳。
- 第四段 蓮位夢想、聖人八十四歳。
- 第五段 選擇相傳、聖人三十三歳。
- 第六段 信行兩座、聖人三十五歳以前。
- 第七段 信心諍論、聖人三十五歳以前。
- 第八段 定禪夢想、聖人七十歳。

下 卷 (通計七段)

- 第一段 越後左遷、聖人三十五歳。
- 第二段 稻田幽栖、聖人五十餘歳。

第三段 山伏教化、聖人五十餘歳。

第四段 箱根靈告、聖人六十餘歳。

第五段 熊野靈告、聖人六十餘歳以後。

第六段 入滅葬送、聖人九十歳。

第七段 廟堂造立、聖人滅後十一年。

右のやうに記載せられた御傳鈔の各段の中で、下卷の方には傳記としても大體聖人御年齢の順位に記載されてあるけれども上卷には、第四段に建長八年の蓮位夢想が載せてあるが、これは聖人八十四歳の時の事であるのに、聖人三十歳前後のまだ御壯年時代の記事の間に此御老後の一段が加へられてある。併し聖人の御傳記を主とするものなれば、此一段は下卷の第六段聖人御入滅の前ところに記載せられなければならぬものである。また上卷の第八段に仁治三年聖人七十歳の時の定禪夢想が記されてあるが、これも下卷の第六段熊野靈告の前後のところに載せられるべきものである。こゝにいふ傳記として不自然な年代の前後したところのあることに氣のついた江戸時代の或る學者は、覺如上人がたゞ思ひ出されるままに書きつけられたから、斯様な年次の前後ができたのだらうと云つて居る。また此覺如上人の御傳鈔によつて江戸時代に高田派では高田御傳鈔や御繪傳を作つて居るが、これもその不自然なところを改めて年代の順に置き替へて居る、これ等は御傳鈔を單に聖人一生の御傳記とのみに考へたからで覺如上人の眞實のお心もちを知らなかつたからである。覺如上人は前に述べたやうに二十六歳の時に此御傳鈔を選述せられてから、幾度も字句の改訂を加へられ、その御老年のところに至るまでその所望の門徒に傳授して居られるのであるから、その記載に誤りがあつたなれば必ず訂正せられたに相違ないが、此年代順位の前後してゐるのはたゞ親鸞聖人御一生の行狀を記すことのみではなく、覺如上人が親鸞聖人を還相の知識として尊崇せられ、その意を述べやうとする必要から時代に頓着せず、信仰の次第によつて記されたものである。覺如上人は自身が導かれた人である親鸞聖人を還相の知識と見られた思想は、即ち親鸞聖人の信仰である還相廻向の考へ方が、その位置をかへて顯はれたものである。

親鸞聖人は自身は地獄一定の凡夫として、師法然上人を唯一の還相の知識として仰がれたのであるから、高僧和讃源空章に

眞の知識にあふことは、かたきがなかなほかたし、流轉輪廻のきはなきは、疑情のさはりにしくぞなきと云つて、親鸞聖人は自己が導かれた法然上人源空を眞の知識と仰がれたのである。「親鸞におきては、ただ念佛して、彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信するほかに別の仔細なきなり。」と云はれた親鸞聖人は師法然上人を、どこまでも還相の眞の知識とし「聖人」であると信じて居られたのである。「聖人」と云ふ語はただ師に對する一の敬稱として、親鸞聖人が用ひられたものではなく、法然上人を眞の知識

還相の聖人であると云ふ信仰から「法然上人」と呼ばずして、何時も「法然聖人」と云つて居られるのである。法然上人の門弟と云はれる人の中に後に一派の派祖と云はれた人は随分多くあるけれども、その執筆の文書或ひはその著書の中に師を法然上人とは敬稱してはゐるが、法然聖人と云ふ「聖人」の文字を書いたものは親鸞聖人以外には殆んど一人もないのである、然るに親鸞聖人の眞筆のものには普通の「法然上人」といふ敬稱は一つもなく、何處にも「聖人」と呼ぶ特別な用語があらはれてゐる。西方指南鈔といふやうな他人の書いたものを、親鸞聖人が寫されたものでも、「法然上人」とあつた「上人」の文字を「聖人」と書き替へて居られるのである。同じものを寫したのもでも鎮西派の和語燈錄などには總べて「上人」となつてゐるから、その師に對する「聖人」の用語は親鸞聖人獨特のものであつた。それで此「聖人」の文字は親鸞聖人がその師に對する單なる敬稱としての用語ではなく「眞の知識」と仰ぎ還相の「聖人」と信じて居られた心もちが文字の上にはあらはれたものと思はれる。此師法然上人に對する信仰を以て「みづからも信じ人にも教へきかしむる」と云ふ親鸞聖人の徹底した教化によつて導かれたその門弟等は、またその思想を置き替へて親鸞聖人を眞の知識とし、還相の聖人と信じ、さては彌陀如來の化現とまで仰ぐに至つたのである。

高田の慶信の書状の中に

淨土の聖教も、知識にあひまひらせんとおもはんことも、菩提不捨も信も、念佛も、ひとのためとおぼえ

られず候、いま師主の御おしへのゆへに、心をぬきて、御こころむきをうかがひ候によりて、願意をさと
り、直道をも得て、まさしき眞實報土にいたり候はんこと、このたび一念聞名にいたるまで、うれしさ、

御恩のいたりに候

と云つて、師の親鸞聖人による教化の恩徳をよるこんであるが、此慶信の親鸞聖人に對する心もちは、親鸞聖人の法然上人を眞の知識と仰がれたものと同じであつたと思はれる、此慶信の状はその眞筆が高田専修寺に傳へられてゐるが、その状の終りに

進上聖人の御所へ蓮位御房申せ給へ

とある、此「聖人」といふ文字も親鸞聖人思想の影響をうけた慶信が、その師に對する還相の知識聖人と仰ぐ心もちが用字の上にはあらはれてゐるものと思はれる。斯様に親鸞聖人の熱烈なる信仰によつて導かれたその門弟等はまた親鸞聖人を還相の聖人と考へ、蓮位房は終に聖人を彌陀の化身と信ずるに至つたことは、此御傳鈔上巻第四段に載せられた蓮位夢想の記事にあらはれてゐる。

蓮位夢想は建長八年（親鸞聖人八十四歳の時）二月九日の夜、蓮位房の夢に聖德太子が親鸞聖人を禮拜して

敬禮大慈阿彌陀佛、爲妙教流通來生者

五濁惡時惡世界中、決定即得無上覺也

といふ四句の文を誦へられたとある、そうして覺如上人はその後、に附け加へて「然れば祖師聖人は彌陀如來の化身にてましますといふことあきらかなり」と記して居られる。此蓮位夢想は建長八年親鸞聖人八十四歳の晩年のことではあるが、此聖人を彌陀、觀音、勢至の三尊中に於ける中尊の彌陀如來の化身と信じられた思想の上から、特に聖人壯年時代の、上巻第四段にこれを書き加へられたのである。即ち前の第二段に勢至の化身と信じられた法然上人の教化によつて他力念佛に歸し、凡夫直入の真心を決定せられた親鸞聖人は、次の第三段に六角堂の觀音救世菩薩から、自行化他の念佛弘通は在家生活の中に於てなさるべきものだと云ふ夢告をうけられたことが記されてあるが、その救世菩薩は聖德太子の本地佛と信じられてゐるから、此前後二段連続して親鸞聖人の化風は前に念佛の教は勢至の化身たる法然上人から相承し、後にその在俗生活は聖德太子の本地救世觀音によつて示されたものである。それで此第三段六角救世觀音の夢相を記した後に

大師聖人すなはち勢至の化身、太子又觀音の垂迹なり、このゆへに、われ二菩薩の引導に順じて、如來の本願をひろむるにあり、眞宗これによりて興じ、念佛これによりて熾なり

と述べられたのは、前の第二段と此第三段とを連続して窺ふべきものであることを示されたのである。此法然上人と聖德太子即ち觀音勢至の二菩薩の導きによられた親鸞聖人はその本地は前の二菩薩を脇士とする三尊中心の彌陀如來であつたと云ふ信仰から特に次の第四段に蓮位の夢想を載せられたのである。また定禪夢想の記事が上

卷第八段のところに配置せられたことも、上巻第五段に法然上人から容易に門弟に許されなかつたところの眞宗の簡要念佛奥義を示した選擇集を親鸞聖人に相傳せられたことを記し、第六段には親鸞聖人の望みによつて法然上人門下の集會に於て信行兩座の別を試みられ、法然上人は親鸞聖人に同意を示されたことを載せ、第七段には信心諍論これも親鸞聖人と他の法然上人門弟と信心一異の問題について論ぜられた時に、他力の信心は智者愚者の別になく、ただ一なるべしと云はれた聖人の説に法然上人が賛成せられたことが記載せられてある、この選擇相傳、信心諍論、信行兩座の三段は何れも勢至菩薩の化身にてまします法然上人が何時もその御門弟の親鸞聖人に賛同して居られるが、ここに於て親鸞聖人の門流として思ひ起すことは化導の上に師弟の別を示して居られるけれどもまさしく我聖人は勢至菩薩を脇士とする中尊彌陀如來の化現であつたとする信仰を強くするのである、そうして此御傳鈔上巻の聖人壯年時代は、聖德太子を理想とし、法然上人の教示を仰ぎその本地觀音勢至二菩薩の引導によられたことを述べられたものであるから、上巻の結末第八段に至つてまた此二菩薩の本意は中尊の彌陀にあることを示して聖人はその本地は彌陀であつたと感じた定禪の夢想を載せられたのである。繪師定禪法橋は聖人の影像を寫す前夜の夢に聖人を拜して、それは善光寺の本願の御房即ち三尊中の本師彌陀であるといふ靈告を感じ得たのである。此「夢想は仁治三年九月二十日の夜なり」とあるから聖人七十歳の時のことで、傳記としての次第は不自然ではあるが、その信仰思想をあらはすために特に此上巻の結末第八段にこれを記されたのである。

故にその結文に覺如上人は

つらくこの奇瑞を思ふに、聖人彌陀如來の來現といふこと炳焉なり、しかればすなはち弘通したまふ教行おそらくは彌陀の直説といひつべし（下略）

と云つて居られるのである。

親鸞聖人が「よきひとの仰せをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり」といつて法然上人を眞の知識、還相の聖人と仰がれた心もちは、また親鸞聖人にまのあたり教化をうけた門徒によつて、いつしか置き替へられて、聖人を還相の知識と仰ぎ、その本地を考へて勢至觀音から加上して終に聖人を彌陀の化身と感じ、その教化を彌陀の直説と仰ひたのである。惠信尼公眞筆の書狀には夢に法然上人を勢至菩薩とし親鸞聖人を觀音と感じたと記されてある。報恩講式文には聖人は彌陀の應現或は曇鸞大師の後身と夢中に感得したことを記し、「情平生の化導を案じ、閑に當時の得益を憶ふに、祖師聖人ただ人にまします、則ち是權化の再誕なり」とあるが、此信仰は往相廻向に對する還相廻向の思想がその熱烈な教化の恩師に向つてあらはれたのであるが、それがまた一步をすすめて、信仰上唯一の恩師知識である親鸞聖人を權化の再誕佛陀の化現と感じたのである。此信仰を以つて書かれたのが覺如上人の御傳鈔である。

第四章 眞宗教義の説示

御傳鈔は親鸞聖人を眞の知識と仰ぎ、權化の聖人と信じた聖人面授の門弟等と、同じ信仰をもつて居られた覺如上人が、聖人の高德を述べられたものであるが、上人は他の高僧の傳記のやうな詳しい行狀記録を作るといふのがその本意ではなかつたのである。既に報恩講式文にも記された六角堂に百日懇念を運ばれた重要な事實があるにもかかはらず、それが御傳鈔には載せられず、又聖人の幾多の聖教選述等のことも録せられず、聖人の九十年といふ御一生の傳記としてはまだ多少の記録さるべきものはあつたに相違ないが、覺如上人は聖人の傳記に寄せて聖人の高德を讚仰し、並せて眞宗教義を示すものを載録すれば足るものとしてゐられたのである。それで眞宗教義を述べられたものとして、此御傳鈔を窺ふときは、上巻は入信の徑路を顯はし、下巻は信後の生活を示されたものと思ふ。即ち上巻第一段に聖人の俗姓と出家得度のことを載せ、その後

それより以來、しばし南岳天台の玄風を訪ひて、ひろく三觀佛乘の理を達し、とこしなへに楞嚴横川の餘流を湛て、ふかく四教圓融の義にあきらかなり

と記して居られるのは、聖人のまだ諸善萬行の假門に住して居られた時代のことを述べられたもので、第二段に

吉水法然上人の禪坊を尋ねて易行の大道を求めんとし、終に法然上人の教化によつて

たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定しまし／＼けり

とあるのは、「方便眞門を出でて、選擇の願海に轉入せり」と云つて喜ばれた聖人の入信を記して、眞宗の廢立即ち雜行を捨てて彌陀に歸するところの教義を示されたのである。そうして彌陀の本願は在家止住の生活のまま救濟せられるのであるが、在家往生の先達であり、その本地と云はれる六角堂の救世觀音は四句の偈を誦して在俗生活を示し、衆生を極樂に引導するのが、觀音の誓願であると云はれた夢想を第三段に載せて、家族的佛教の宗風を説明せられたのである。しかしその信仰は觀音或は勢至などに歸すべきでないから

後二大士の重願、ただ一佛名を專念するに足れり、今の行者錯て脇士につかふることなかれ、ただちに本佛を仰べしと云云

と記して、觀音勢至の脇士に仕へず、ただ彌陀一佛を信するところの一向專修の本義を示されて居るが、その彌陀一佛に歸することが觀音の本意であることを、第四段の蓮位夢想によつて示された、即ち觀音の化身が「敬禮大慈阿彌陀佛」とその本佛を禮拜せられたことはその本意を表現せられたものである。

第五段の選擇相傳は、眞宗の要義は選擇本願の念佛であつて、それを法然上人の教示によつて相承したことを述べ、その念佛は凡夫自力の行ではなく眞實の信心を本とするものであることを示すため、第七段の信心諍論

にはその眞實の信心は凡夫の起すところの信にあらず、如來廻向の他力信心であるから、凡夫の善惡を問はず智愚の差別を云はず、ひとしく佛の本願力に攝せらるべきものであることを教示せられたのである。そして此處まで述べられた七段の記事は垂迹の上では、聖徳太子と法然上人の教化によるものであるが、その本地の上からは觀音勢至の二菩薩の大慈大悲の引導によるものである、即ち淨土和讃に

觀音勢至もろともに、慈光世界を照耀し、有縁を度してしばらくも、休息あることなかりけり

とあるやうに二菩薩の濟度を仰ぐものであり、また

彌陀觀音大勢至、大願の船に乗じてぞ、生死の海にうかびつつ、有情をよばふてのせたまふ

とあつて、その攝化の徳用を示せば三尊であるけれども、三尊別立に見るものではなく、彌陀一尊に結歸するものであることを示すために、御傳鈔上卷最後の第八段に、定禪の夢想を記して、その脇士を發して本佛の彌陀に歸すべき一向專修の教義を述べられたのである。御傳鈔の下卷は信後の生活を示されものとしてこれを窺ふ時は、下卷第一段は信心の行人の上にも、處世にはまた種々の勤苦あることを示すために聖人配流の法難を載せ、第二段には稻田の幽栖に於ける聖人の佛法弘通衆生利益の事を記して信心の行者はまた自行化他すべきことを教へられるもので、聖人化導の意も惠信尼の書狀に聖人の御物語を記して、

自信教人信難中轉更難として、みづからも信じ、人をも教へて信ぜしむる事、まことの佛恩にむくひたて

まつるものと信じ (下略)

とあるから、聖人御自身の意は信心の行者として佛恩を報ずるための教化であつた、また和讃にも

他力の信を得んひとは、佛恩報ぜんためにとて、如來二種の廻向を、十方にひとしくひろむべし

とあるやうに、御傳鈔の此一段は信後の自行化他を示されたものである。そうしてその信後の行化は「無慚無愧の此身にて、まことの心はなけれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ」とあつて自然と疑謗の徒も廻心せしむるの得益あることを示されたのが第三段の山伏廻心の記事である。また第四段の箱根靈告は箱根權現が親鸞聖人を尊敬せられたことを記し、次の第五段の熊野靈告は聖人の教化によつて念佛する一向專修の門徒大部の平太郎を熊野權現が禮拜したことを載られたものではあるが、此前後の二段は廢立の教義の上から「別して神祇を崇めず信ぜねども」神明は專修念佛の行者を喜び護るといふことを示されたものである、尤も他力の念佛は如來廻向によるものであるから、その念佛守護の得益に於ても聖者と凡夫との別なきことを説くために、特に此前後二段の記事を以て前者は聖人に後者はその門徒に對する神祇の念佛尊敬の得益を述べられたのである。そうして當時我國一般に信じられてゐた本地垂迹の説によつて、熊野權現の本地を説明した後には

かるがゆへに、とてもかくても、衆生に結縁のころさしふかきによりて、和光の垂迹を留めたまふ、垂迹をとどむる本意、ただ結縁の群類をして、願海に引入せんとなり

と、聖人の神祇觀を記して、垂迹の神祇の本意は一向專修の念佛に歸せしむるにあることを述べられたのである。尤もここに考慮を要することは、今日存在する總ての神社に祀るところの神は國家の功勞者の偉人或は歴史上の人格者祖先等を神として祀つたものだから、そう云ふ尊崇の神々は別であるが、親鸞聖人或は覺如上人時代の神祇といふのは一般に宗教的な鬼神と信じられてゐたのである。従つてその鬼神の中には善鬼神と惡鬼神とがあつた、此一般的信仰から、聖人も和讃に

天神地祇はことごとく、善鬼神となづけたり、これらの善神みなともに、念佛の人をまもるなり

と云つて居られる。諸神本懷集には神には實社の神と權者の神とがあるとして、實社は怨靈を祀るもので怨みを結んで死んだ人、鬼或は畜類の崇をなすものを祀つた神社で、こう云ふ神には近づくべからずと云ひ、權社は佛菩薩の神として化現せられたものとしてあるが、此時代の一般人は歴史上の偉人功勞者などを祀つた神社の存在することを知らなかつたらしい、それは古く日本書紀或は續日本紀などに就いて見ても、神武天皇以後歴史上の人物を神として祀つたことは記されてゐない。日本紀の神武天皇から持統天皇まで四十二代二十八卷の歴史の中に社を作り、神を祀り、或はいろいろ神に關することが二百以上も記されてゐるけれども、それ等の神は神代神話の神や靈妙不思議と信じられたものや、人間の不可抗力な出來事などの宗教的なものを神としてゐたのである。また日本書紀の中には歴史上の人物の死に關するもの或は喪葬の事改葬の事陵墓などを作つた事などが、二百八

十以上も記されてあるけれども、それらの歴史上の人格者を神とし或はそれを祀るところの神社を作つたことは一つも載せてない。また人の葬儀なども今日のやうな神葬祭のやうな儀式は古い書物の上には出てゐない。また人の葬儀なども佛教が我國に傳はるまでは支那古代の葬事と同じやうな哭泣の儀式を行ふたのである。そうして神は人の死を穢れとして忌み嫌ふものとし、若しそれを犯せば神の祟りがあると信じ、神祇令延喜式などにも人の死穢を神祇や鬼神の惡むところのものとし、またその神々はこれに祈ることによつて、神の祟りを鎮め、災厄を除き、或は種々現世の福神を禱るところの宗教的な神と信じられて居たのである、それで佛教が我國に傳つた後に於ても續日本紀の天平神護元年十一月二十三日の詔の中に

神たちをば、三寶より離れて、觸れぬものぞとも人の念ひてある、然れども經を見まつれば、佛の御法を守りまつり、尊みまつるは諸の神たちにいましけり

とあつて、漢譯の經典に見えてゐる神祇と我國土の神々とは同じ性質のものとして考へて、神は佛法を尊信して喜び守ると詔せられたのである。此神祇鬼神が佛法を喜び守るといふことは、漢譯の諸教典中には随分多く説かれてあるが、仁王經護國品には次のやうな文がある。

大王よ、汝の國土中に百部の鬼神あり、この一々の部にまた百部あり、是經を聞かんことをねがふて、此諸の鬼神汝の國土を護る、大王よ、國土亂る時は先づ鬼神亂る、鬼神亂るる故に萬民亂れ、賊來つて國を

劫め、百姓亡參す、臣と、君と、太子と、王子と、共に是非を生じ、天地怪異し、二十八宿星の道、日月も時を失し、度を失するの時に多く賊起ることあり、大王、もし火難、水難、風難、一切の諸難あらんにも、亦この經を講ずべし。

國王が仁王經を講ずる時は、その國土の諸神はその經を聞くことを喜んで、その大王の國土をまもるといふのが此經の意である。仁王經は我國では古く持統天皇の御代からの歴代尊崇の國家的經典であつたから、前の天平神護元年の詔に經を見まつれば、諸神たちは佛法を尊敬するとあるのも、此仁王經によられたものと思はれるが、此仁王經ばかりでなく他の諸經にも神祇、神明、鬼神、諸天等の佛法守護尊敬のことが見え、それ等の神も支那古典に記されてゐる天神地祇も我國の神々も、以前は一般に同じ性質のものとして信じられてゐたのである。従つて我國神も佛法を喜ぶものとせられ、また佛經中に説かれた本迹思想がやがて我國神のうへにも認められるやうになつたのである。此信仰は日本神道の發展にも非常な利益を與へたのである。この思想は後世まで繼續せられ、明治初年神佛分離、排佛毀釋の暴擧によつて破壊せられてしまつたのであるから、本地垂迹説を理解するうへには、我國の以前に於ける一般的な神祇信仰の思想を考慮せられなければならぬ。

此神祇と佛菩薩との關係は淨土教の念佛が一切の佛菩薩の本意であるとするれば同時にまた諸神の本懐とするものである。ところが法然上人の專修念佛は聖道を捨てて淨土に歸し、雜行を捨てて念佛に歸すべき旨をすすめられ

たのであるが、その雜行を捨てるに就いては上人は選擇集に「阿彌陀佛以外の餘の佛菩薩及び諸世天等に禮拜恭敬するを禮拜雜行と名く」とある。此諸世天等とあるのは當時佛菩薩の垂迹化現とし、又いろ／＼な祈禱の宗教的對照となつてゐた天部神祇の類を指したものであるが、專修念佛の方では阿彌陀佛以外のこれ等の佛菩薩及び總べての宗教的對照となつてゐるものに禮拜恭敬などの行爲をすることを雜行と名け、これを捨てて彌陀一佛のみを專念するものを一向專修の行と教へられたのである。この雜行を捨てて彌陀一佛に歸するところの廢立の教を、最も徹底的によくその信仰の上にあらはして居られるのが親鸞聖人である。それで聖人も「淨土の行にあらぬをば、ひとへに雜行となづけたり」と云ひ、殊に當時の祈禱的聖道佛教の行爲を悲歎し、それを述懐して「かなしきかなや道俗の、良時吉日ゑらばしめ、天神地祇をあがめつゝ、卜占祭祀つとめとす」と云つて居られる、またそれ等の現世祈禱に對して一向專修の念佛の上からは、「佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雜修となづけてぞ、千中無一ときらはるる」と示して居られる。此廢立の思想は專修念佛の信仰の上には重要な宗義であるから、聖人は教行信證及びそのほかいろ／＼その著作の聖教の中にそれを述べて、一向專修の行者の態度を明かにして居られるのである。いまこの覺如上人選述の御傳鈔下卷第五段の大部平太郎の記事も特にその宗義を示すために此處に載せられたのである。

大部の平太郎は御傳鈔に「聖人の訓を信じて、専らふたころなかりき」とあるやうに一向專修の門徒であつ

たが、ある時領主の命によつて紀伊國熊野權現に參詣せなければならぬことゝなつた、彼れは聖人の徹底した廢立の教化をうけた念佛者であつたから、自分の信仰から熊野詣をするのではないが、領主の命として止むを得ず參詣せなければならぬが、此場合に於て如何にすべきか、又それが雜行或は雜修の失となる千中無一の行ではないかと案じたので、態々常陸の大部から京都の聖人のもとへお尋ねにまいつたのである。聖人は專修念佛は諸佛菩薩の本意、従つて諸神の本懐が專修念佛にあることを懇に示され、もとよりそれ等の餘の佛菩薩・諸神等に心をよせて禮拜恭敬するは雜行であり、それに種々現世の祈禱をなすものは雜修の失ともなるが、一向專修の念佛者の處世の上に於ては公務にも従ひ、主君の命を奉すべきであることを教へられ、その熊野詣の意義も

その靈地をふみ、その社廟に詣せんこと、更に自心の發起するところにあらず

といつて、念佛行者の處世の身のふるまいを訓されたのである。覺如上人がそれを此御傳鈔の第五段に載せられたのも、眞宗に於ける廢立の教義を説くと同時に、念佛者の信後の生活を示すためであつた。

次に第六段は信後佛恩の稱名、上盡一行の念佛を示すために、聖人入滅の此一段にそれを寄せられたのである。即ち聖人御不例のことを記した後

それより以來、口に世事をまじへず、ただ佛恩のふかきことをのぶ、聲に餘言をあらはさず、もはら稱名たゆることなし、而して同八日午時頭北面西右脇に臥給て、ついに念佛のいきたへをはりぬ

とあるのは聖人の入滅に寄せて上盡一行の念佛即ち信後佛恩報謝の稱名を教へられたものである。これは口傳鈔に「信のうへの稱名の事」と題して、高田の覺信房が臨終の際にも稱名怠らず、聖人その間斷なき稱名の意を尋ねられた時、覺信房のこたへに「息の通はんほどは、往生の大益を得たる佛恩を報謝せずんばあるべからずと存するについて、かくのごとく報謝のために稱名のつかまつるものなり」といつたことを載せ「これをもてこれを案ずるに、眞宗の肝要、安心の要須、これにあるもの歟」と記されてあるのと同じく、信後の稱名を示されたものである。口傳鈔も覺如上人の選述であるが、親鸞聖人在世中のいろ／＼の出來事を擧げて、それに寄せて眞宗の教義を述べられたことは全く此御傳鈔と同じ形式をもつて選述せられた眞宗の聖典である。

御傳鈔下巻第六段には信後報謝の稱名を示されたから、次の第七段は聖人滅後廟堂造立の記事に寄せて師徳報謝の意を述べて

其稟教を重し、彼報謝を抽るともがら、縑素老少、面々に歩みを運んで、年々廟堂に詣す

と記し、ここに眞宗教義の信後の生活中に於ける師徳報謝の一段を以てこの上下二巻の結末とせられたのである。

尙この御傳鈔の詞書に添へられた繪の上に於ても、その構圖に就いて見るに眞宗の教義を、その繪の上にもあらはさうとして居られることが認められる。即ち上巻第八段の定禪夢想の段の最後の詞書に「あきらかに無漏の

慧燈をかかけて、とをく濁世の迷闇をほらし、あまねく甘露の法雨をそそぎて、はるかに枯槁の凡惑をうるほさんがためなりと、仰ぐべし、信すべし」とあるが、此段の繪の終に三本の掛樋を繼ぎ合せ、やり水がその樋を傳つて大きな水溜に落ちて居る圖がある。それは三本の掛樋を傳つて流れる水は淨土念佛の三國相承の意を示し、その水の落ちる溜は吉水法然上人の淨土一門をあらはしたものである。またその溜の周圍に小鳥の水を飲みに来てゐるのは渴したる釋門儒林の徒が吉水教團の専修念佛に歸したことを示し、その溜水は大地に落ちて秋草の間を流れて居る圖は、大谷本願寺聖人の門流が邊鄙の群類を化益することをあらはしたもので、詞書の「あまねく甘露の法雨をそそぎて、はるかに枯槁の凡惑をうるをさん」とある詞を繪にあらはしたものである。こう云ふ教義を示したものであるが此ほかにも繪相の上に随分認められるが、また詞書の文意を繪にあらはしたものである。定禪夢想の段の圖に、白犬と黒犬とが向ひ合つて戯れて居るところが畫かれてあるのは、定禪が前夜の夢を翌日聖人の禪室にまゐりて物語つたのであるから、陰陽晝夜を黒白の犬によつて示されたものである。そうして定禪が聖人の禪室へまゐつたのはその翌朝のことであるから禪室の前の櫃には朝顔の花が咲いて居る。また上巻第三段の六角夢想の圖に就いて見るに、六角堂の一隅に二人の僧形と一人の俗士とが枕を並べて寢て居るところが畫かれてあるが、後世この二人の僧形を法然、親鸞兩聖人と解し、俗體の人を九條兼實だらうと云つたものがある、しかしその俗體の人は侍鳥帽子を冠つて居るから、それは武人であつて、九條兼實ではない。ま

た僧形も法然・親鸞兩聖人をあらはしたのではなく、詞書に「四月五日の夜寅時」とあるから、その夜中の意味をあらはすために寝て居るところを畫かれたものである、それで東本願寺所藏の光養丸善如上人の奥書ある繪卷には堂内に居る人は何れも座つて居り、そのかほりに六角堂の椽下に猿廻しが宿假りをして寝て居るところが畫かれてあつて、やはり夜陰のころもちを示すものである、このほかにもいろ／＼畫かれた草木等によつて教義を示し或は季節等をあらはすものもあるが、今は繪相に就いて多く述べる必要もないから、これぐらゐにとどめることとする。

第五章 聖人略傳の選述

御傳鈔にあらはれた、眞宗の教義に就いては、前に述べた通りであるが、既に本願寺聖人親鸞傳繪と題して居られるから一面は聖人の御傳記であるけれども、覺如上人はその教義を説くことを主とせられた。爲に御傳記としては至極簡單なものとなつたのである、同じ覺如上人の選述せられた口傳鈔にも、聖人或はその門弟などに關する逸事が随分多く記されてあるが、そういふ逸話は御傳鈔よりは寧ろ口傳鈔の方が詳しく載せられてある。併し口傳鈔は法然上人、親鸞聖人、如信上人等の三代相承の、いろ／＼の法語を記されたものであり、此御傳鈔は表面聖人の略傳として、選述せられたものであるから、初めに聖人の俗姓と出家得度とを載せ、次に吉水法然上人の門に入られたことを記し、最後には聖人の入滅、葬送及び廟堂造立のことを記録せられたのである。同覺如上人選述改邪鈔に親鸞聖人の常の御持言として「われは賀古の教信沙彌の定なり」といつて居られたとある。「また親鸞閉眼せば、加茂川に入れて魚にあたふべし」と仰せられたことが記されてあるが、彼の勞働に従事し、下層の生活に満足して、常に念佛のみを所作とした、賀古の教信を理想とせられた、聖人の御一生もまたその信仰以外には何ものもなかつたのである。覺如上人はこういふ聖人の傳記としては形以上の詳細な事件を列記するよ

りも、その聖人の信仰即ち真宗の教義をあらはすことを主とし、その行状の方は略述せられたのである。それで此略傳選述の御傳鈔によつて聖人の歴史的な御一生を窺ふには、尙他の史料を参考してかからねばならぬが、あまり煩はしい考證などは成るべく避けることゝして、今はこの御傳鈔を中心として、聖人の御一生に就いて、少しく述べることゝする。

第一節 壯年時代の聖人

御傳鈔上卷第一段は親鸞聖人の行状を記すうへに於て、その發端として、先づ聖人の御俗姓を載せられたのであるが、聖人の生家は藤原氏北家の系統に屬し、内鷹を祖先とする日野流の一門であるから、御傳鈔の初めに、

夫聖人の俗姓は藤原氏、天兒屋根命、二十一世の苗裔、大織冠鎌子内大臣の玄孫、近衛大將右大臣、從一位内鷹公六代の後胤、弼の宰相有國卿五代の孫、皇太后宮大進有範の子なり

として藤原氏の系圖を述べ、その有國卿から五代目の孫にあたる有範といふ人の息男が親鸞聖人であると記されてある。此有國から有範までの五代といふのは

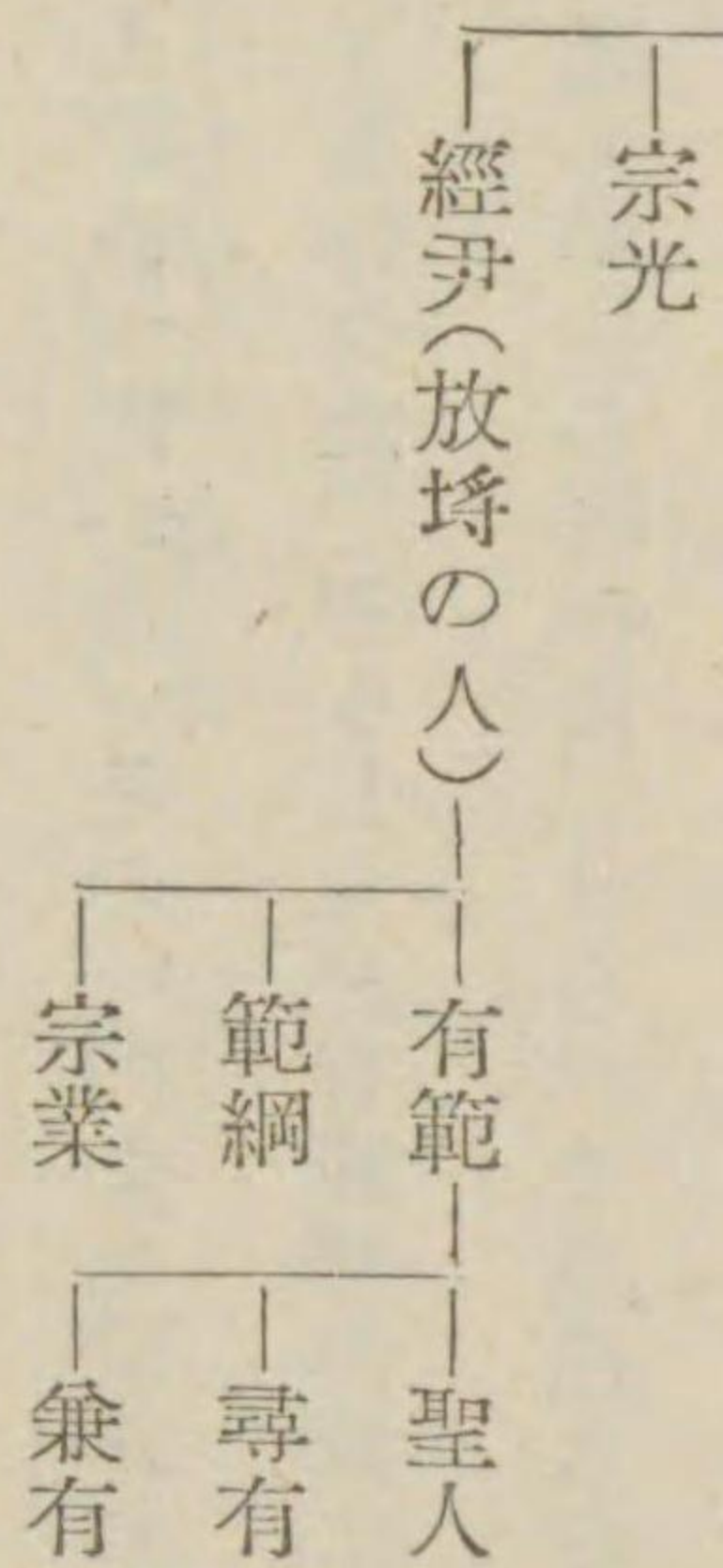
有國—資業—實綱—有信—有範（聖人御親父）

此五代の系圖は尊卑分脈といふ古い系圖の中にもかういふ順序に載せてある。此四代目の有信などは相應に有

名な人で、承德三年九月六十一歳で薨去せられ、その長男實光卿はその子孫が分れて日野・裏松・烏丸・柳原・竹屋等といふやうな随分澤山な家々が出てゐるのである。此實光卿は久安三年五月廿一日七十九歳で薨じた人で、有信卿三十一歳の時にこの實光が生れたのである、此有信卿の子實光の弟が有範卿だといふことになつて居るが、此有範卿のことはあまり判らない上に此人が承安三年に生れられた親鸞聖人の御親父であつたとすると聖人の祖父にあたる有信卿、伯父にあたる實光卿などの時代の隔が遠いために、私は十餘年前此聖人の系圖を疑つたことがあつた、併しその後研究して居る間に尊卑分脈南家系圖の中に經尹といふ人があつて、その子に有範があつて、その下に聖人の御舍弟である山門權律師尋有の名が記され、その有範の父經尹の名の下に「放埒人也」と記してあることに氣付いた、それで私の疑は解けてしまつた、即ち有範卿は經尹の子であつて、經尹は實は有信の子實光の弟であつたけれども、放埒の人であつたから、その一門から除かれ、系圖からも經尹一代を除いた爲に、その年代が合はないやうになつたことも判つた。そうして此有範卿が世に出られなかつたことも、その御子息の聖人及び尋有・兼有などの御兄弟が悉く幼少の時に出家せられた理由なども、いろ／＼考へて見たが、發表の機會を得ずしてそのままになつてゐる。併しいまこゝに煩はしくそれを述べないが、近頃故山田文昭氏の遺稿が發表せられ、その中に同氏も既にこの南家の系圖に早くから注意してそのことを記して居られる、後の本願寺系圖の中に此有範卿の實父經尹を一代に加へたものもあるが事實はその通りで、即ち有範卿は有國卿五代の孫ではなく

六代の孫であつた、そうして有範卿の實の兄弟には範綱及び宗業といふ人があつて、即ち聖人の伯父君にあたる方であつた。

有國—資業—實綱—有信—實光—日野諸家



こゝに系圖に示したやうに、有範卿の實父は經尹といふ人で放埒の事があつて此の子としては立身出世の道がひらけないので、その子範綱と實業とは伯父宗光の子となり、範綱は後に後白河法皇の近臣として從三位まで昇進し、法皇崩御の際に出家した。宗業も式部大輔に任ぜられその晩年漸く昇殿を聽され、當時の人はそれが破格の取り扱ひだと驚いたほどであつた。併し有範卿だけはそのまま残され、父經尹を家系から廢除し、有範卿は皇太后宮大進に任ぜられたとあるけれども、早く逝去せられた爲にかそれ以上あまり昇進もせられずに終られたらしい。此有範卿の父經尹を除いた表向の系圖が尊卑分脈に載せられ、御傳鈔にも此公表の家系を示して「有國卿五代の孫皇太后宮大進有範」と記されたのである。此有範卿の長子が親鸞聖人で、それに尋有、兼有などの御舍弟があつた。歎徳文や敬重繪詞によると聖人幼少の頃には、實の伯父にあたる宗業卿について俗典を學ばれたと傳へられ、また聖人は父君有範卿の逝去によつて同伯父範綱卿を養父として養和元年聖人九歳の春出家得度して天台の學を修め、その教理に通達せられたことは此御傳鈔上卷第一段に於て記されたところである。聖人は此天台の修學中に比叡山では如何なる僧階に進んで居られたかといふことは此御傳鈔には記されてない。また報恩講式にも見えず、敬重繪詞の聖人略傳にも出て居ない、後世徳川時代に作られた高田正統傳などには聖人二十五歳の時に聖光院の門跡にすえられたと書いてあるけれども、聖人の叡山修學の時代に山門に於ては特別な家柄の出身であるか、或は大權勢に阿附するものでなければ高位の僧階を得ることは容易ではなかつたのである。當時眞實に佛道を求めんとするものが山門を出でて法を他に求めるものを遁世、或は隱遁といつたくらい山門の内部は俗化し墮落して居たのである。後に聖人の内室惠信尼公が、その息女覺信尼公に送られた書狀によれば、聖人が比叡の山に修學のころは山門の堂僧を勤めて居られたと記されてあるから、それは確なことである。彼の大原の良忍なども叡山の住侶であつたころは堂僧の職に在つて、晩年大原山に隱遁して念佛を修したと後拾遺往生傳に見えて居る。聖人もこれと同じく叡山の堂僧であつたが、さらに名利を望むことなく、眞に道を求むるものとして先づ堂僧くらいのところに留るものが多かつたであらう。聖人の在山修學中たゞ求道の望みよりほかには何もなかつたのである。此聖人の當時の心もちは存覺上人の歎徳文に最もよくそれを云ひあらはして居られる。爰に情出要を窺つて此思惟をなさく、定水を凝すといへども識浪しきりに動き、心月を觀ずといへども妄

雲なほ覆ふ、而るに一息^{つが}迫ざれば千載に長く往く、なんぞ浮生の交衆^{けうしゆ}を貪りて、徒に假名^{けみやう}の修學に疲れん(歎徳文)

聖人の道を求めてやまず、而も聖道の修行は容易にその到達點を見出し得ず、限りある人生の無常を觀するにつけても、そのやるせない思ひが此歎徳文の聖人の語にあらはれて居る。聖人はこゝまで考へられた時に、尙山門に留つて法華一乘の妙典を窺ひ、その修道に勇進し、彼の觀音力を念じて光明の世界が求め得られたであらうか、觀音の化身と仰がれたまふ聖徳太子は、在俗の佛法者であり、而かも太子傳を窺ふ時は太子は淨土念佛弘通をその本意とせられた。彌陀三尊の脇士觀音の垂迹であつた、然れば當時世にその聞えある法然上人の專修念佛に歸して出離を求めんか、その裁斷を仰がんがために、終いに聖人は當時太子の本地佛と傳へられた、六角堂の觀音に百日の懇念をはこばれたのである。此事は弘長三年に書かれた、惠信尼公自筆の書狀に

山を出で、六角堂に百日籠らせ給ひて、後世を祈らせ給ひけるに、九十五日のあかつき聖徳太子の文をむすびて示現にあづからせ給ひ候ひければ、やがてそのあかつき出でさせ給ひて、後世の助からん上人にあいまいらせんと尋ねまいらせて、法然上人にあいまいらせて(中略)たゞ後世の事は善き人にも悪き人にも、同じやうに生死を出づべき道をば、たゞ一すぢ仰せられ候ひしを承り定めて候ひしかば、上人(法然)のわたらせ給はん處には、人は如何にも申せ、たとひ惡道にわたらせられ給ふべしと申すとも、世々

生々にも迷ひければこそありけめとまで思ひまうする身なればと、様々に人の申し候ひし時も仰せ候ひしなり

とある。此書狀は聖人の息女覺信尼公が、聖人入滅のことを越後に居られた母公惠信尼公に報ぜられた時に、越後の母公からの返狀の中に記された文である、この文によれば聖人は百日の間六角堂へ晴雨を論ぜず不闕に參籠せられ、九十五日の曉天に觀音から聖徳太子示現の文によつて、出離の要道は淨土教の念佛だといふことを暗示するところの靈告を得て、ついに法然上人を訪ねて其の教化により、他力念佛の信仰に入られたのである。此六角堂觀音の靈告によつて示された聖徳太子の文といふのは松子傳の中に載せた太子と淨土教との關係を示す太子廟窟偈文であつた。

大慈大悲本誓願、愍念衆生如一子、是故方便從西方、誕生片州興正法、我身救生觀世音、定慧契女大勢至、生育我身大悲母、西方教主彌陀尊、眞如眞實本一體、一體現三同一身、片域化緣亦已盡、還歸西方我淨土、爲度末世諸衆生、父母所生血肉身、遺留勝地此廟窟、三骨一廟三尊位、過去七佛法輪處、大乘相應功德地、一度參詣離惡趣、決定往生極樂界、(廟窟偈文)

此太子廟窟偈文は聖人が日來から見て居られた聖徳太子傳の中に記されてあつたもので、太子と淨土教との關係を示した偈文であるが、聖人はまた六角觀音から此偈文の靈告をうけ、その暗示によつて法然上人の教化を仰

ぐに至つたことは聖人の終生忘れることのできない慶びであつた。それで聖人は師法然上人の教化の恩を謝すると共に特に此太子廟堂偈を尊重して居られたから、聖人は此偈文だけを書寫されたことは度々であつた。そうして聖人はその晩年に於ても此廟堂窟偈を他力信仰の意義に解して十一首の太子和讃を作つて、その本地の観音と垂迹の太子との引導によつて入信したことを感謝して居られるのである。

- (1) 佛智不思議の誓願を、聖徳皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとくなり
- (2) 救世觀音大菩薩、聖徳皇と示現して、多々のごとくにすてずして、阿摩のごとくにそひたまふ
- (3) 無始よりこのかたこの世まで、聖徳皇のあはれみに、多々のごとくにそひたまひ、阿摩のごとくにそひたまふ
- (4) 聖徳皇のあはれみて、佛智不思議の誓願に、すゝめいれしめたまひてぞ、住生定聚の身となれる
- (5) 他力の信を得んひとは、佛恩報ぜんためにとて、如來二種の廻向を、十方にひとしくひろむべし
- (6) 大慈救世聖徳皇、父のごとくにおはします、大悲救世觀世音、母のごとくにおはします
- (7) 久遠劫よりこの世まで、あはれみましますしるしには、佛智不思議につけしめて、善惡淨穢もなかりけり
- (8) 和國の教主聖徳皇、廣大恩徳謝しがたし、一心に歸命したてまつり、奉讃不退ならしめよ
- (9) 上宮皇子方便し、和國の有情をあはれみて、如來の悲願を弘宣せり、慶喜奉讃せしむべし
- (10) 多生曠劫この世まで、あはれみかふれるこの身なり、一心歸命たへずして、奉讃ひまなくこのむべし

(11) 聖徳皇のおあはれみに、護持養育たへずして、如來二種の廻向に、すゝめいれしめおはします

この十一首の太子和讃は彼廟窟偈文、即ち六角觀音からうけられた太子示現の文意を含んで作られたものであるが、聖人の内室惠信尼公もその聖徳太子御示現の文を寫してその息女覺信尼公に贈られたことが惠信尼公の書狀に見えて居る。

此六角堂百日參籠のことは既に聖人の内室惠尼公の書狀に記されており、存覺上人の歎徳文にも「特に歩みを六角の精舎に運んで、百日の懇念をいたすところ、まのあたり告を五更の孤枕に得て、數行の感涙に咽ぶ」とある、また覺如上人も報恩講式文にもその意味を記して居られる、然るに御傳鈔には此六角堂百日參籠の重要な事實が載せられてないが、それは聖人の御傳記としては是非記載せられなければならぬ事件であるけれども、一面に眞宗教義を述べる連絡組織の都合上それを略して直に吉水入室のことを第二段に記されたものと思はれる、即ち御傳鈔第二段の初めに

建仁第一曆春のころ 上人、二十九歳、隱遁のころざしにひかれて、源空聖人の吉水の禪坊に尋ねまいり給き

として、こゝに聖人は自力雜行の山門を遁れて吉水法然上人の門下に歸し他力念佛の行者となられたことを此一段に載せられたのであるが、前の第一段に聖道の修行を示し、此第二段の終には「他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定しまし／＼けり」として、此二段連続して正雜二行の廢立、即ち自力を捨て、他力に

歸するといふ眞宗の教旨を述べるためにその間に於ける六角百日の參籠の記事を略せられたのである。そうして聖人も教行信證の後序にみづから入信の経路を記して「然るに愚禿釋鸞建仁辛酉の曆雜行を捨て、本願に歸す」といつて居られるから御傳鈔は此後序の文意を受けて此前後二段を連続せしめられたのである。建仁辛酉の曆は即ち建仁元年聖人廿九歳の時である、聖人はその後序の初めに當時の教界の實情を記して「竊以聖道の諸教は行證ひさしく廢れ、淨土の眞宗は證道いま盛んなり、然るに諸寺の釋門教に昏くして眞假の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷ふて邪正の道路を辨ることなし」といつて居られるが、御傳鈔は此文の意をうけて吉水入室のことを述べた後に

是則世くだり人つたなくして難行の小路まよひやすきによつて、易行の大道におもむかんとなりと記されてある、この熱心な求道の望みにもだへられた聖人は、聖道の門を捨て、法然上人の専修念佛に歸し「飽まで凡夫直入の眞心を決定し」て法悦の生活に入られたのである。

法然上人の出られるまでの我國に於ける淨土念佛の思想は聖道自力の諸宗に従屬するものであつた、親鸞聖人が久しく修學せられた天台比叡山に於ても四種三昧の隨一として念佛三昧の修行が加へられてあつた、しかしそれは淨土念佛の眞意ではない、既に經に一向專念無量壽佛とあるから本來淨土の念佛は聖道諸宗の外に獨立すべきであつたものが聖道教の中に附隨して居たのである、然るに法然上人に至つて始めてその本義をあらはして、

こゝに専修念佛の淨土教が別立せられたのである。それで法然上人の選述せられた選擇集にその眞意を述べ、先づ最初に聖道を捨て、淨土に歸し、雜行を捨て、正行に歸すべき旨を宣言せられたのである。此宣言は念佛宗の獨立の上には重要なものであるが、當時聖道諸宗の中に於て聖道を捨て雜行を廢することを説くやうな新宗門の成立は、他の諸宗にとつては實に重大問題であつた、従つて諸宗からいろいろ批難も起つてくる筈であるから、法然上人はその専修念佛の宣言である選擇集を公開することを憚つて居られたのである。即ち上人もその選擇集の奥書にその意を漏らして居られる。

庶幾くはひとたび高覽を経たるの終は、壁底に埋んで窓前にのこすことなかれ、恐くは破法の人をして惡道に墮さしむるがゆへなり。

此奥書の意味に於て上人はその門弟たりと雖も容易に此書を寫し傳へることを許されなかつた、親鸞聖人も教行信證後序に此選擇集に就いて「眞宗の簡要念佛の奥義これに攝在せり、見るもの諷り易し、まことにこれ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり、年をわたり、日をわたり、その教誨を蒙るの人千萬なりと雖も、親といひ疎といひ、此見寫を獲るの徒はなはだ以て難し、然るに既に製作を書寫し、眞影を圖畫す、是れ專念正業の徳なり、是れ決定往生の徴なり、仍て悲喜の涙をおさへて、由來の縁をしるす」といつて、その相傳をうけたことの喜びを記して居られる。聖人は元久二年三十九歳の時その師法然上人から選擇集の書寫を許され、それには同年四月

十四日特に師上人がその眞筆で「選擇本願念佛集」の内題と「南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本」の十四字、及びその相傳宛名を釋綽空と記して、聖人に授與せられた、而してまた師上人の眞影を寫し、これにも師上人はその銘文を染筆して聖人に授けられた。此眞影の銘文を書かれたのは同年閏七月二十九日のことで、聖人はこれまで綽空と稱せられたのを、此頃に善信房と改號せられたから、此閏七月の眞影の銘文には特に改名の文字を書き添へられたのであつた。京都二尊院所藏の元久元年の七條起請文の法然上人門弟連署中にも「釋綽空」と自署せられてあるが、聖人は建仁元年法然上人の淨土門下に入られた時から法名を釋綽空と稱せられ、元久二年四月選擇集相傳の後は善信房と改號せられたのである。此事は聖人みづから教行信證後序に詳しく記載して居られるが、聖人は此選擇集及び眞影を相傳授與せられて非常な喜びを以て師恩を謝するころもちはその後序の上にはあらはれて居る、それで覺如上人も御傳鈔上卷第五段に聖人の選擇相傳の事を記すに此後序を原文のまゝ載せて居られるのである。

法然上人の選擇集に宣言せられた專修念聖の思想は既に聖道諸宗の問題となつて居るから、上人は元久元年七條起請文を製して門弟百八十餘人に連署せしめ、その態度を訓誡して諸宗の批難を遁れやうとせられたのであるが、法然上人の眞信仰がその門弟等の間に徹底するにつれて、その正雜二行の廢立の態度も自然と表面化せられて、諸宗からの排斥も益々甚しくなつてきたのである、これがために南都或は山門の衆徒はしばしば朝廷に上奏し、終いに承元元年の春に至つて法然上人は、遠流の罪に行はれ、その門下の中にも住蓮安樂などは死刑に處せられ、また流罪の門弟も數名に及んだが、親鸞聖人も同じく流刑となつたのである。

南都或は山門衆徒等の專修念佛を排斥する本來の意思は、御傳鈔に「淨土宗與行によりて聖道門廢退す、これ空師の所爲なりとて、たちまちに罪科せらるべきよし、南北の碩才憤申けり」とあるやうに、淨土念佛宗の獨立に對して聖道諸宗の廢退を恐れたからであるが、その上奏の材料として取り扱はれたものは專修念佛教徒の信仰生活の上にはあらはれた行狀がその批難の重要なものであつた、藤原定家の日記（明月記）に當時の事を記して承元元年二月九日の條に「近日たゞ一向專修の沙汰搦め取られ拷問筆端の及ぶところにあらず」と云つて居るが、重罪とせられた住蓮安樂など／＼は搦め取られ死罪に行はれたけれども、それによつて南都北嶺の徒は満足するものではなかつた、法然上人傳の記するところによれば「安樂死刑におよびて後も逆鱗なをやまずして、かさねて弟子のとがを師匠にをよぼされ、度縁をめし俗名をくだされて、遠流の科にさだめらる」とあるが、住蓮安樂などの重刑に行はれたものは先づ別として、尙數名の門弟が流罪となつたことは各その門弟にいろ／＼罪科の理由があつたに相違ない、法然上人は前にも述べたやうに專修念佛の上に重要な正雜二行の廢立の教義を宣言して居られるけれども、常に他宗に對して遠慮がちであつたから、その思想を明に示すことを避けて居られた。上人のこの態度はやがて上人の滅後に淨土宗の異流が起つた一の原因であつた、即ち上人滅後諸行往生をゆるし雜行

を混じた淨土宗一派が成立するに至つたが、それは折角の專修念佛思想が再び法然上人以前の聖道從屬の念佛に轉向して終つたものといつてもよい。然るに親鸞聖人は最もよく法然上人の眞信仰に徹底してその思想を不遠慮に表現して居られる、これは親鸞聖人の性格とその熱烈な信仰から何事でも自己の意中を告白せずには居られなかつたのである、こう云ふ聖人の御性格は法然上人の門下に居られる時代にもまた同様であつて、その雜行を捨離する態度があまり明かであつたことが聖人の上に罪科の及んだ原因であらうと思ふ、併し聖人は既に早くから妻帯して居られたことがまた罪科の一であつたと思はれるが、聖人の妻帯生活に就いては御傳鈔上卷第三段に六角堂の觀音から妻帯問題に關する靈告を受けられたことが載せられてある、此靈告は御傳鈔に「建仁三年癸亥四月五日夜」とあつて、聖人三十一歳のことゝなつて居る、然るに横卷親鸞傳繪の古本には「建仁三年辛酉四月五日夜」と記したものが多く、辛酉の干支は聖人廿九歳法然上人の門下に入られた年であるが、それを建仁三年としたのは覺如上人の書かれた草稿に建仁元年と記された草書體の「元」の字を「三」の字に見誤つて寫したものであるかと思はれる、そうすれば聖人が妻帯問題についての靈告を受けられたのは建仁元年春、吉水入室の直後初夏四月五日のことであるから、聖人は餘程早くから妻帯して居られたやうに思はれる。しかし後に寫された御傳鈔には辛酉の干支を癸亥と改められてあるから、何れが正しいかと云ふことは尙十分研究した上でなければ定めがたいけれども、聖人が法然上人の門下に居られる當時既に妻帯して居られたことは確であるが、法然上人

の專修念佛の教化は

彌陀の本願は善惡を隔てず、持戒破戒を嫌はず、在家出家を簡ばず、たゞ他力の力の心に住して念佛申さば、一念須臾の間に阿彌陀佛の來迎にあづかるべし

といつて居られるやうに、その門徒の妻帯生活を淨土念佛思想の上に認めて居られるのである、尤も當時聖道家の僧徒の間にも持戒堅固のものは希れであつたから、法然上人はそれを評して「近來の僧尼を破戒の尼と云ふべからず、持戒の人破戒を制することは正法像法の時なり、末法には無戒名字の比丘なり」といつて居られるのである、こういふ時代に於て法然上人の專修念佛宗の上に在家往生の妻帯生活を公然認容せられたことは、當時の墮落した聖道諸宗として必しも批議すべき筈のものではないが、當時專修念佛の獨立に對抗した諸宗の僧徒はそれを批難して、專修念佛停止の事を度々朝廷に上奏に及び、たま／＼院の御所の女房等が上人の門弟住蓮安樂に歸依したことを問題として、山門南都の僧徒は再度の奏問を経て、ついに承元元年春住蓮安樂などの處刑を手始めとして、その首魁である法然上人を流罪に處し、同時にその門弟の中にも流刑のものが數名あつたが、親鸞聖人もその一人であつて、聖人は越後の國府に配流の身となられたのである。此當時の所感について聖人はみづから教行信證後序の中に述べて居られるが、御傳鈔下卷第一段にはその後序を引いて聖人北越左遷のことを記載せられてある。

法然上人の門弟中流刑に處せられた人々の罪科には、各いろ／＼な理由があつたであらうが、親鸞聖人にその罪科の及んだ理由については、既に述べたやうに聖人はあまりに専修念佛の廢立思想を不遠慮に表現して居られたことが當時の官憲の忌諱にふれたものと思はれるが、また一面にはこの聖人が淨土門下にあつて早くから公然と妻帯生活を營んで居られたことがその罪科の理由となつたに相違ない。皇帝紀抄といふ書物の中に法然上人が土佐國に配流せられ、その門徒の中で婦人に關係のあつた人々はその身を禁ぜられるなどの刑罪があつて、婦人等にも各その沙汰があつたと記してあるから、聖人もその子女（即生房、今御前）のある中を官憲の手によつて止むなくその夫人とも離別せられ、越後國國府の配所に赴かれたのであつた。聖人は此時三十五歳の壯年であつたが、當時「かくすは上人、せぬは佛」などといふやうな批評もあつたやうに、聖道家の中にも、ひそかに婦人關係をもつた僧徒が随分多くあつたが、在家往生が認められる淨土門下に入られた親鸞聖人は公然妻帯して居られたけれども、聖人はその妻帯生活をもつてみづから得意とせられるものではなかつたのである、それで聖人の多くの著書の中にたゞの一度も妻帯生活を正しきものとして高調せられたことはなく、教行信證にも「悲しいかな愚禿鸞愛欲の廣海に沈没」すると述懐せられた聖人は無戒名字の比丘として、その自己の妻帯生活に對する慚愧の心をもつて如來の本願の救濟のあつたことを慶んで居られたのである。

第二節 東國時代の聖人

聖人は承元元年春のころ越後の國府の配所に赴かれた後五年を経て、建曆元年十一月法然上人と同じころに流刑を赦免せられたことは御傳鈔下卷第一段に記されてゐるが、聖人もみづから教行信證後序の中に「空師并に弟子等、諸方の邊州に坐して五年の居緒まじよを経たり」といつて居られる。聖人は赦免の後も尙しばらく越後國に在住せられ、後常陸の國に移住せられたのであるが、後世の傳説では建曆二年聖人は一旦越後國から京都に歸へられ、山城國山科に興正寺（後年佛光寺と改む）を建立し、その年直に伊勢國を通過して、常陸國に下られたといつたものもあるが、それは事實ではない、既に御傳鈔下卷第一段に「勅免ありといへども、かしこに化をほどこさんがために、なほしばらく在國したまひけり」とあつて、聖人は流刑赦免の後に尙しばらく越後に在國せられたことを記し、その次の第二段の初めに「聖人越後國より常陸國に越へて」としてあるから、聖人は京都へは歸らずに直に越後國から常陸國へ往かれたのである。覺如聖人の弟子乘專の作つた最須敬重繪詞の中に記された親鸞聖人の略傳にも

越後の國、國府にうつされて、おほくの春秋を送りたまひけり、明師聖人（法然）歸京の時、おなじく勅免ありけれども、事の縁ありて、東國にこへ、はじめ常陸國にして専修念佛をすすめたまふ

とあつて、聖人が建暦二年に一旦歸洛せられたといふやうなことは後世附會の説であつて、信すべきものではないのである。

聖人は越後に配流の身となられた後も、師法然上人の淨土宗の眞實なる教を信じて、常に念佛の報恩生活のうちを日を送つて居られたのであるが、聖人は此越後國で三善然則といふ人の女を内室として、多くの子女をあげられ、在俗の念佛者としての生活を営まれたのであつた。その内室は後に恵信尼といつて、聖人入滅の後八十八歳の高齢に至るまで生存せられたのである。その恵信尼公の實父三善爲則のことは、一つの傳説として今日まで遺されて居るだけで、何等の確實な史料も見付からなかつたが、近頃藤原兼實の書いた日記玉葉の中に、治承元年のころに三善爲則といふ人が越後介に任ぜられたことが記されてあつたので、私の關係してゐる高田學報第七輯にそれを紹介しておいたから、それを見ていただきたいと思ふ。此越後介であつた三善爲則の息女が聖人に嫁し、栗澤の信蓮房、益方入道、小黑女房、高野禪尼、覺信尼公などの子女を生まれたのであつた。此聖人の内室恵信尼公が聖人入滅の後弘長三年二月十一日附で越後國から京都に居られた息女覺信尼公(彌女)に宛てて送られた書狀中に、聖人の東國在住時代に於ける信仰生活のことが詳しく記されてゐる、その書狀によると、聖人は建保二年四十二歳のころから寛喜三年五十九歳の時まで、念佛生活の間に淨土三部經を讀誦することに努められたのであるが、寛喜三年四月常陸國に居られるころ、いろ／＼考へられた後、ただ經を誦むばかりが佛恩を報じ衆生を利益するものではなく、自信教人信とあるから、自己の信仰生活の上からは他の人々にも念佛教化をするところが、まことの佛恩を報ずるものだと云つて、東國の同朋教化に努めることに決心せられたのである。これは建保三年聖人五十九歳の時であるが、御傳鈔下卷第二段に聖人が笠間郡稻田郷に於て「幽栖を占といへども道俗跡をたづね、蓬戸を閉といへども貴賤衢に溢る、佛法弘通の本懐ここに成就し衆生利益の宿念たちまちに満足す」とあるは此時のことを記されたものと思はれる。しかし御傳鈔には此稻田の念佛弘通のことが何時のころであつたかといふことを記して居られないために、後世の學者はそれを元仁元年聖人五十二歳のことであると斷定して終つた。尤も聖人五十二歳のころには既に此常陸の稻田地方に居住して居られたであらうけれども、聖人が衆生化益の念佛弘通に努めやうとせられたのは、寛喜三年聖人五十九歳の四月以後のことである。然るに後世の學者がそれを元仁元年聖人五十二歳のことだと云ひ出したのは、高田派の五天良空といふ人が高田正統傳の中にそれを書いたのが始りで、それ以來一般の學者はそれに同意して終つたのである。それは聖人選述の教行信證化卷の中に、聖人が釋迦如來滅後の年代を計算せられたところに

勘^ルニ如來涅槃時代ハ、當^ルニ周第五主穆王五十一年壬申^ニ、從^{ヨリ}ニ其壬申^ニ、至^テニ我元仁元年^ニ、後堀川院諱 甲申^ハ、二二一

百八十三歲也。

とあるから、聖人が教行信證化卷の此處を書いて居られたところが、此元仁元年即ち聖人五十二歳の時であつたの

だらうと考へたのである。しかし此文をよく注意して拜見すると「我元仁元年」と記されてあつて、その年號に「我」といふ字がついて居る、それは元仁元年よりは二分後、幾度も年號が改元せられてから、聖人がその以前の元仁元年までの年數を計算せられたから、その年號が支那の年であるか、我國の年號であるかを區別する爲めに「我元仁」と「我」の字をその年號の上に加へられたのである。聖人が教行信證を書かれた直ぐその年の年號を記すのに「我元仁」などと云はれる筈はないのである。存覺上人も六要鈔の中に聖人が教行信證を大體完成せられた後間もなく入滅せられたと云つて居られるし、そのほかいろ／＼の方面から考へて見ても教行信證は聖人が京都にかへられてから選述せられたものといふことが立證される。しかし今それを論ずることは煩はしく、讀者の迷惑だと考へるから略すこととするが、教行信證化卷の中に記された、元仁元年といふ年號が聖人の京都へ歸られてから書かれたものとする、聖人が稲田で同朋教化を初められたのは聖人五十二歳の時のことだと決定することは出来ない。そうして聖人が自行の念佛生活から進んで同朋教化に努められるやうになつたのは、前に述べたやうに聖人五十九歳の四月のことであつた。聖人はこの同朋教化に盡すことに決心せられるに就て數日の間考へられたと惠信尼公の書狀に記されてあるが、聖人は法然上人の教化によつて自己が如來の救濟にあづかる身となつたことを喜び、越後配流の後もただ徹底した自己の信仰生活の自行のほかに他人に布教するといふやうなことをせられなかつたのである。それは聖人は師法然上人の專修念佛の淨土宗以外に別に一流をたてる考へもなく、ただ法然上人の教のままを仰いだ熱烈な信徒であつた。また自己が中心となつた教團を組織しやうといふやうな意志もなかつた。聖人は「是非しらぬ邪正もわからぬこの身なり、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり」といつて居られるやうに、他を教化することによつて自己が名利に墮し、人師たらんとする慢心の起ることを恐れて居られたのであるが、寛喜二年聖人五十八歳の時、聖覺法師の唯信鈔を讀んでその末尾に「今生ゆめのうちのちぎりをしるべとして、來世のさとのまへの縁をむすばんとなり、われおくれば人にみちびかれ、われさきだたば人をみちびかむ、生々に善友となりて、たがひに佛道を修せしめ、世々に知識として、ともに迷執をたゞむ」とある文に共鳴せられたものか、自行の上には他を教化することも佛恩を報ずるところの重要な仕事であることを深く考へられ、その習寛喜三年四月に至り、尙此問題について、數日間考へられた後、ついに意を決して東國の同朋教化を開始せられたのである。聖人の熱烈なる信仰より出たる教化は、聖人居住の稲田の草舎に多くの同朋があつまるやうになり、僅かの間に「幽栖を占むといへども道俗跡をたづね、蓬戸を開といへども貴賤衢に溢る」と云はれたやうに、稲田の草舎は、繁昌するに至つたのである。三河妙源寺所藏の親鸞聖人門弟交名牒に見えてゐる眞佛、入西、乗念、性信、順信等三十六人の聖人直弟は、その大部分この寛喜三四年のころに此稲田の草舎に來集した求道者であつたと思はれる、此門弟中で先輩者であつたと思はれる眞佛は此寛喜三年に二十二歳であつた、眞佛は常陸の眞壁に居住した人であるが、その眞壁の地には同じ法然上人の

第五章 聖人略傳の選述

門流、高野明遍の系統に屬する、敬佛及び心佛といふ念佛者の居たことが一言法談抄及び沙石集等に見えて居るから、此眞佛も同系統の眞壁の念佛者であつたと思はれる、その眞壁の眞佛が聖人の徹底した教化によつて、その門下に歸したのではないかと思はれる、その眞佛といふ法號も聖人から授けられたものではなく、以前から一流の念佛門に入つて出家した人であつたと私は考へてゐるが、此眞佛にはその門弟が非常に多くあつた、近頃服部清五郎氏によつて發見せられた一丈三尺もある埼玉縣河合の眞佛報恩塔は、眞佛滅後五十四年後にその門徒の人々が百五十貫といふ、多額の淨財を以て造立したものである、これによつて考へても此眞佛の教化が東國にひろく及んでゐたことが認められるが、その他の聖人直弟等も各々自行化他の念佛弘通に盡したから、聖人歸洛後に於ても東國の念佛は一層隆盛に及んだのである。

聖人が寛喜三年ごろから、東國同朋の教化に意をかられるやうになつてから、稻田に聖人の教化を仰ぐものが漸く多くなり、聖人の徹底したる正雜二行の廢立、殊に現世祈禱を以て千中無一の行とし、それを不遠慮に高言せらるゝことは、その地方在住の祈禱師には大なる影響を及ぼすものであつた、それで祈禱を業とする一人の山伏は聖人を害せんとし、稻田の草舎を訪て終に聖人の高德に化せられ、一向專修の念佛者となり、明法房と號したことは御傳鈔下卷第三段に記されてある、此明法房が聖人の門下に歸したことも御傳鈔にはその年時が記されていないけれども、やはりこれも寛喜三四年ごろのことであらうと思はれる、聖人の建長四年二月廿四日附の消息

の中に

なにごとよりも、明法御房の往生の本意をとげて、おはしまし候こそ、常陸國うちの、これにこゝろざしおはします、ひとくの御ためにめでたきことにて候へ、往生はともかくも凡夫のはからひにてすべきことにて候はず

とあるから、明法房は建長三年か、或はその翌年の春ごろに目出たき大往生を遂げたものと思はれる。

聖人の常陸の國に於ける念佛弘通は僅かの間、聖人を中心としてその教化を仰ぐもの多くなるにつれて、聖人はそれ等の求道者の人師として上にたつことを心ぐるしく思はれ、どこまでもその求道者を以て共に如來の救濟をよろこぶところの念佛の同朋同行としてそれに接近せられた、しかしその門徒等は聖人を恩師知識として尊崇したのであつた、聖人は述懐和讃に「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもふまじ、如來の願船いまさずば苦海をいかでかわたるべき」と云つて居られるやうに、小慈小悲もなき自己の教化によつて衆生を救ふものではなく、「無慚無愧のこの身にて、まことの心はなけれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ」とある如く、東國の念佛弘通は各自念佛者によつて流布せられるものと考へられ、何人が中心となつて念佛を弘通せられるとも、それに頓着せられるものではなかつた、聖人自身の信仰上からは、東國の念佛者の中に留つて名利に人師となることを恐れて、寧ろその中心を避けて都に歸り、故師法然上人の遺訓の如く閑居の念佛に餘生

を送らうとせられたのである。それで聖人は東國の同朋と別れをおしみつゝ、六十餘歳のころたゞ一人都に歸られたのである。

第三節 歸洛後の聖人

聖人の歸京せられたのは、大體天福、文曆のころ聖人六十一二歳の時であつたと思はれるが、聖人の歸洛は、その信仰上から、東國に於ける念佛教團の中心人物たること避けて、尙都に生き遣つて居る法然上人門下の人々の中で、昔ながらの師上人の教化のままの念佛を喜んでゐる同僚と共に、故上人世在の思ひ出を語りつゝ法悦の生活を送らうとせられたのである。覺如上人は御傳鈔下巻第五段に

聖人故郷に歸て、往事をおもふに、年々歳々夢のごとし、幻のごとし、長安洛陽の栖すまも、あとをとゞむるにちろちろとて、扶風馮翊ふふうふうところくくに移住したまひき、五條西洞院あたり、これ一の勝地なりとて、しばらく居を占めたまふ、この比いにしへ口決をつたへ、面受をとげし門徒等、をのく好よしみをしたひ、路をたづねて參集したまひけり

として、聖人歸洛後の生活状態を記して居られるが、その歸洛後に聖人の後を追つて年々訪ねくる東國の念佛の同朋も相應にあつたとは云つても、聖人東國在住當時稻田の草舎に集つたやうにそれほど多數の同朋の上洛したのではない、聖人の性信房に宛てられた消息にも

くだらせたまひてのち、なにごとかさふらふらん、この源藤四郎殿におもはざるに、あひまいらせてさふらふ便のうれしさに、まうしさふらふ

とあるやうに、聖人は偶々上洛した門徒に會つたことを喜ばれ、以前上洛してより大分久しく接しなかつた重要な門徒に贈られた消息の文などに就いて考へても、それは折々東國門徒の來訪するものがあつたと云ふだけである。聖人はそれ等の門徒に對しても親切に念佛の教を説き聞かせて歸へされ、また中には上洛の人に書状を托して念佛法門について尋ね來るものも随分あつたが、それに對しても一々返狀を認めて教へられたのであつた。今日傳へられてゐる聖人の消息は殆んど門徒からの尋ねによつて答へられた御返事の文がその大部分であつて、聖人の方から強ひて押し賣りするやうな教化ぶりではなかつたのである。そうして念佛法門について教示を請ふものに對しては「唯信鈔」「後世物語」「自力他力」などの先輩又は同僚の正しき著書を読むことを勧められたことが聖人の消息中に多く見え、どこまでも聖人の教化ぶりは自己が中心となつて教團を指導しやうとせられるものではなく、たゞ自己の信仰の上から師法然上人の專修念佛の世に弘通せられることを望んで居られたのである。こう云ふ態度であつた聖人の歸洛後に於ける念佛生活の經濟はあまりにゆるやかではなかつた。京都に於ける聖人の經濟向はその御舎弟尋有僧都が天台の僧徒としてまだ生存して居られたから、多少はその助力に頼られると

ころがあつたかもしれないが、そのほかにわ遠國の門弟等から折々贈つてくる二百文乃至三百文の懇志の収入があつたらしいのである、十二月二十六日附教忍房宛の聖人の消息に

護念房のたよりに、教忍御坊より錢二百文御ころざしのものたまはりてさふらふ、さきに念佛のすゝめのもの、かたぐの御中よりとて、たしかにたまはりてさふらふひき、ひとぐによるこびまうさせたまふべくさふらふ

とあつて、教忍房が二百文の錢を上洛の門徒に托して贈つてきたたどが記されてある、そうして「さきに念佛のすゝめのもの云々」とあるのは教忍房が自己の教團の人々の懇志をまとめて送つたについて、謝辭を述べられたものである。斯様な折々贈られる東國散在の諸教團の門徒からの懇志は聖人の閉居生活を助けるものであつた、しかし何分遠國からの到來であるから、そう度々絶えず送つてくるものではないし、その各地に散在する小教團それ自身の經濟問題もあるから、京都に於ける聖人の經濟はその御家族が共に同居生活をなし得らるゝほどのものではなかつた、さればこそ聖人歸洛後の御家族は各々別處に居られ、御末子の、彌女いよめ即ち後に覺信尼公と稱せられた方は、尼照阿、或は東の女房等の家に侍女として給金生活をせられ、内室惠信尼公は越後に居られる子息益方に養はれ、同く子息信蓮房と云ふ方は越後の三善氏に縁ある同國栗澤の坊、或は野積のづみの小寺に居住して居られたのである。斯様に聖人の御家族は各地に別居し、聖人は京洛中とくゞに度々移住せられ、最後はその御舎

弟尋有僧都の坊舎に寓居して入滅せられたのである。

聖人の東國在住のころ、その教化をうけた門弟がその歸洛後に聖人を慕ふ思ひのあつたことは高田の慶信が京都の聖人のもとへ送つた書狀によつて知ることが出来るが、それに對する聖人の慈愛にみちた御返事ごへんじの消息も傳はつて居て、その聖人の門徒に對する熱情が窺はれる。殊に高田の覺信房が東國から、はるゞ上洛して病にかゝり、聖人の寓居に於て歿し、その臨終の際に覺信房の絶へ間なき報恩の稱名念佛について聖人がその意を尋ねられたことは、覺如上人の口傳鈔の中に記されて居るが、その信仰の上に於て聖人とその門徒との間に師弟の情のあつたことが認められるのである、また常陸國大部の平太郎が領主の命によつて熊野神社に參詣せなければならぬことになつた時、彼は聖人の教化をうけた熱烈な一向專修の念佛者であつたから、それが一向專念の宗義を害する禮拜、雜行、或は現世祈禱の千中無一の行に屬するものではないかと考へたから、わざゞ京都五條西洞院の聖人の寓居を訪てその教示を請ふた、そうして聖人はこれに對して親切に教へられるところがあつたことは、御傳鈔下卷第五段に詳しく記されてあるが、これによつて見るも聖人の教化とその門徒の信仰の上に於て一向專修の信仰の態度が如何に徹底的なものであつたかと云ふことが認められる。此平太郎が上洛して聖人に面謁したのは、御傳鈔によれば聖人が暫く五條西洞院に居られたころだとある、專修寺所藏顯智筆記の「自然

法爾の法語」の奥書に

正喜二歳戊午十二月、善法坊僧都御坊、三條トミノコウジノ御坊ニテ聖人ニアイマヒラセテノ、キ、ガキ、ソノトキ顯智コレヲカクナリ

とあるが、此三條富小路善法坊僧都御坊と云ふのが聖人御舍弟、尋有僧都の住坊であつて、此顯智筆記によれば、聖人は正喜二年八十六歳の頃には既に此尋有僧都の住坊に寓居して居られたのであるから、五條西洞院に於て、平太郎が聖人の教示を請ふたのは正喜二年（聖人八十六歳）以前のことであつたと思はれる。聖人は此八十六歳の頃既に尋有僧都の住坊に居られたのであるが、聖人は弘長二年十一月廿八日九十歳の高齡に達せられて此坊舎に於て入滅せられたのである。御傳鈔下卷第六段に聖人入滅の坊舎を記して「禪坊は長安馮翊の邊、押小路南、萬里小路東」とあるのは此尋有僧都の坊舎のことである。御傳鈔下卷第六段の初めに聖人御不例のことを記して、
聖人弘長二歳、壬戌、仲冬下旬の候より、いさゝか不例の氣まします

とあるから、聖人はその御病床にあらせられること數日にして十一月二十八日に入滅せられたのであるが、何分九十歳の御高齡のことであるから御老疾のためであらう。御傳鈔には、

それより自爾以來口に世事をまじへず、たゞ佛恩のふかきことをのぶ、聲に餘言をあらはさず、もはら稱名たゆることなし、しかうして同第八日午時、頭北面西右脇に臥給て、ついに念佛のいきたへをはりぬ

として、その入滅を記し、御葬送は「はるかに河東の路を歴て 洛陽東山西麓、鳥邊野の南のほとり、延仁寺に

葬したてまつる、遺骨を拾て、同山の麓、鳥邊野の北邊、大谷にこれをおさめ畢ぬ」とある。專修寺所藏の教行

信證古寫本の奥書に

親鸞聖人御入滅、弘長二歳壬戌十一月二十八日午時、御年九十歳、同二十九日午時、專信遠江國池田住僧、顯智下

野！高田住僧、御舍利藏畢。

とあるから、或る學者は此史料によつて聖人入滅の當日直に火葬してその翌二十九日に遺骨を大谷に藏めたのだと云つて居られるけれども、如何に急速に葬送を營んだとしても二十八日の午時に入滅せられたものをその翌日の午時までに納骨するといふやうなことはその當時に於ては成し得られるものではない、従つてこの專修寺所本の奥書の記事には誤脱のあるものと思はれる。然るに西本願寺所藏の古寫本教行信證の奥書には次のやうな記事が載せられてあつたのである。

弘長二歳壬戌十一月二十八日、

末尅、親鸞聖人御入滅也、

御年九十歳、同二十九日、戌時、

東山御葬送、同三十日御舍利藏、

佛滅後 二千百三十五歳、
入末法後七百三十五歳、當文永十二歳乙亥也、

依賢劫經、仁王經、涅槃經說言

此奥書に「當文永十二年」とあるから、此記事は聖人入滅後十四年目に當る文永十二年に何人かによつて記されたものと思はれる。これによると聖人は十一月二十八日に入滅せられ、その翌二十九日の戌時即ち今日の午後八時ごろに東山に於て火葬し、その翌三十日に御遺骨を拾つて大谷に納めたのであるが、恐くはこれが事實を記録せられた史料であると思ふ。

聖人の内室惠信尼公が弘長三年二月十日附で、その息女覺信尼公へ宛てられた書狀に

(去年)
ごぞの十二月一日の御ふみ(二十日)はつかあまりにたしかにみ候ぬ、なによりも殿之御(往)わうじやう中々はじめて申におよばず候

とあるが、「去年の十二月一日」は弘長二年十一月三十日に聖人の納骨の濟んだその翌日(十二月一日)であるから、十一月二十九日の夜葬送があつて、その翌三十日納骨を終り、その翌日即ち十二月一日に覺信尼公は書狀を認めて越後に在住せられる母公惠信尼のもとへ父聖人の入滅を報ぜられたのである。

惠信尼公はこの報知に接して、その翌年二月十日附を以て京都の覺信尼公へ宛てられたものが前記の書狀である、そしてその書狀にはまた

されば御(臨)りんずはいかにもわたらせ給へ、うたがひ思ひまひらせぬうへ、おなじ事ながら(益)ますかたも御(臨)りんずにあいまいらせて候ける、(親子)おやこのちぎり(契)と申ながら、ふかくこそ覺え候へばうれしく候也

といつて居られるが、越後の益方は九十の高齡に達せられた父聖人を見舞べく上洛して、聖人の御臨終に會つたことを母公惠信尼が喜んで居られるのである。また前記專修寺所藏の古寫本教行信證の奥書に遠江の專信下野の顯智が聖人の納骨に關係したことが記され、御傳鈔にも「終焉にあふ門弟」といふ語があるから、專信及顯智は聖人入滅の際に上洛してゐたのであらう、それは下野高田の顯智はたま／＼京都に来て居たものか、或は顯智は三河の地に永らく在住したことがあり、專信も早くから三河に移住してゐたのであるから、兩人共聖人御不例の報に接して三河國から上洛したものではないかと思はれる。尙前記の惠尼公の書狀には聖人在世中に於ける事どもがいろ／＼記されてあり、その他にも聖人の事蹟に就いて述べることは幾らもある、しかしそれは限られたる本書の紙面に於てはゆるされないので、今はこれを略することとするが、此御傳鈔下卷第六段の聖人入滅、大谷納骨の事を述べられた後に

しかるに終焉にあふ門弟、勸化をうけし老若、おの／＼在世のいにしへをおもひ、滅後のいまをかなしみて、戀慕弟泣せずといふことなし

と記されて居るやうに、聖人入滅のことが東國の門徒の間に傳はると、彼等の聖人を追慕するの情はいよ／＼深く、わざ／＼上洛してその墳墓に參詣するものが年々多くなつてきたのである。ここに於て聖人滅後十一年、文

久九年にその墳墓改葬、廟堂造立のことがあり、その大谷廟堂が中心となつて我淨土眞宗の教團統一の基礎が成
立したのである。

聖人入滅後大谷廟堂の造立は我淨土眞宗の興隆發展について大なる關係を有するものである。それで覺如上人
は御傳鈔下卷、最後の第七段に特に廟堂造立のことを記して、その全卷の總結とせられたのである。

文永九年冬のころ、東山西麓、鳥避野の北、大谷の墳墓をあらためて、同麓よりなを西、吉水の北の邊に
遺骨を堀渡ワタシて、佛閣をたて、影像を安ず、此時に當て、聖人相傳の宗義、いよく興じ、遺訓ます／＼盛
なること頗ナニ在世のむかしにこえたり、すべて門葉國郡に充滿し、末流處處に遍布して、幾千万といふこと
をしらず、其稟教ほんぢうを重おもくして、彼報酬ねんじゆを抽ひくともがら、緇素老少面々にあゆみを運はこんで、年々廟堂に詣す、凡
聖人在生の間、奇特これおほしといへども、羅縷らるに追あらず、しかしながらこれを略するところなり。

聖人滅後東國の門弟等は、聖人を追慕するの情はいよく深くなり、時々慕參するものが多くあつたので、聖
人の息女覺信尼公は東國門弟等と議つて、文永九年冬のころこれまでの大谷の聖人の墳墓を別所に移し、廟堂を
造立して、聖人の影像を安置せられたのである。此廟堂造立の敷地は、當時聖人の息女覺信尼公が嫁して居られ
た夫禪念房の宅地であつた。その廟堂の敷地は古く建保年中には按察局といふ人の所有であつたものが、その後

子孫に譲り渡され、或は轉賣せられ、その間幾人かの手を経て、正嘉二年七月廿七日に禪念房が價八十貫を以て
その地を買ひ取つたのであるが、それはまだ親鸞聖人在世中のことであつた。聖人の御末子である彌女、即ち覺
信尼公は、初め日野廣綱の妾となつて、子息覺惠を生まれたが、廣綱卒去の後に尼照阿或は東の女房などの侍女
として生活せられ、後年此大谷の宅地を購入した善念房に嫁し、また唯善といふ一子をあげ、夫妻共にこの大谷
の地に居住せられたのであつた、然るに文永九年冬覺信尼公は夫善念の承認を得て、東國門弟等の合力により、
聖人の墳墓をその住宅地に移し、其處に廟堂を造立して、聖人の眞影を安置せられたのである。その敷地は往年
善念房が買得した活券によれば、「口五十五丈二尺五寸、奥南北四丈五尺、奥東十一丈五尺」とあり、その所在を記
して

(杭)
在今小路末南限西大路、限東堺クイ
限北類地、限南類地

とあるが、これが本願寺の起源であつて、後世蓮如上人の時代までは此處に本願寺は存在してゐたのである。蓮
如上人の帖外御文に、「京都東山粟田口青蓮院みなみのほとりは、わが右郷ぞかし」と云つて居られるやうに、蓮
如上人も此地に本願寺のあつた時代に誕生せられたのであるが、御傳鈔に「吉水の北の邊に遺骨を堀渡ワタシて佛閣を
たて影像を安ず」とあるのは即ちその今小路末南の地であつた、此廟堂創立及其後の沿革については幾多の古
文書史料が現存して、詳細にそれを考究することができる。しかしこゝには述べ盡すことができないから、その

大要を記すにとどめて置くが、此廟堂が聖人の門弟崇敬の中心となつて、「末流處々に遍布す」と云はれた諸國散在の諸門弟の教團が統一せられ、眞宗發展の基礎となるのであるから、覺如上人は特に最後に此一段を記されたのである。

大谷廟堂造立の後、覺信尼公の夫善念房はその敷地を尼公に讓與して、文永十二年に歿したが、尼公は建治三年十一月にその廟堂の地を東國の聖人門弟中へ宛て、寄進せられ、それを諸門弟等の共有とし、同時に尼公の子孫がその廟堂の管理をせられることになつた。そうして尼公の息男覺惠法師が尼公の意を承けてその廟堂の管理者となられたが、その管理者を後に留守職と稱した。また覺惠の子息覺如上人は聖人の御孫如信上人を師として、聖人の信仰を傳へられ、父覺惠法師の後を承けて大谷廟堂の留守職となり、親鸞聖人の高德を讚仰し、法然、親鸞、如信、三代承相の念佛の義を説き、聖人の廟堂を中心として來集する聖人の遺弟を教化することに努められたのであるが、此御傳鈔も上は聖人の高德を歎じ、下は門徒に對して専修念佛を弘通せんがために選述せられたものである。

第六章 總 結

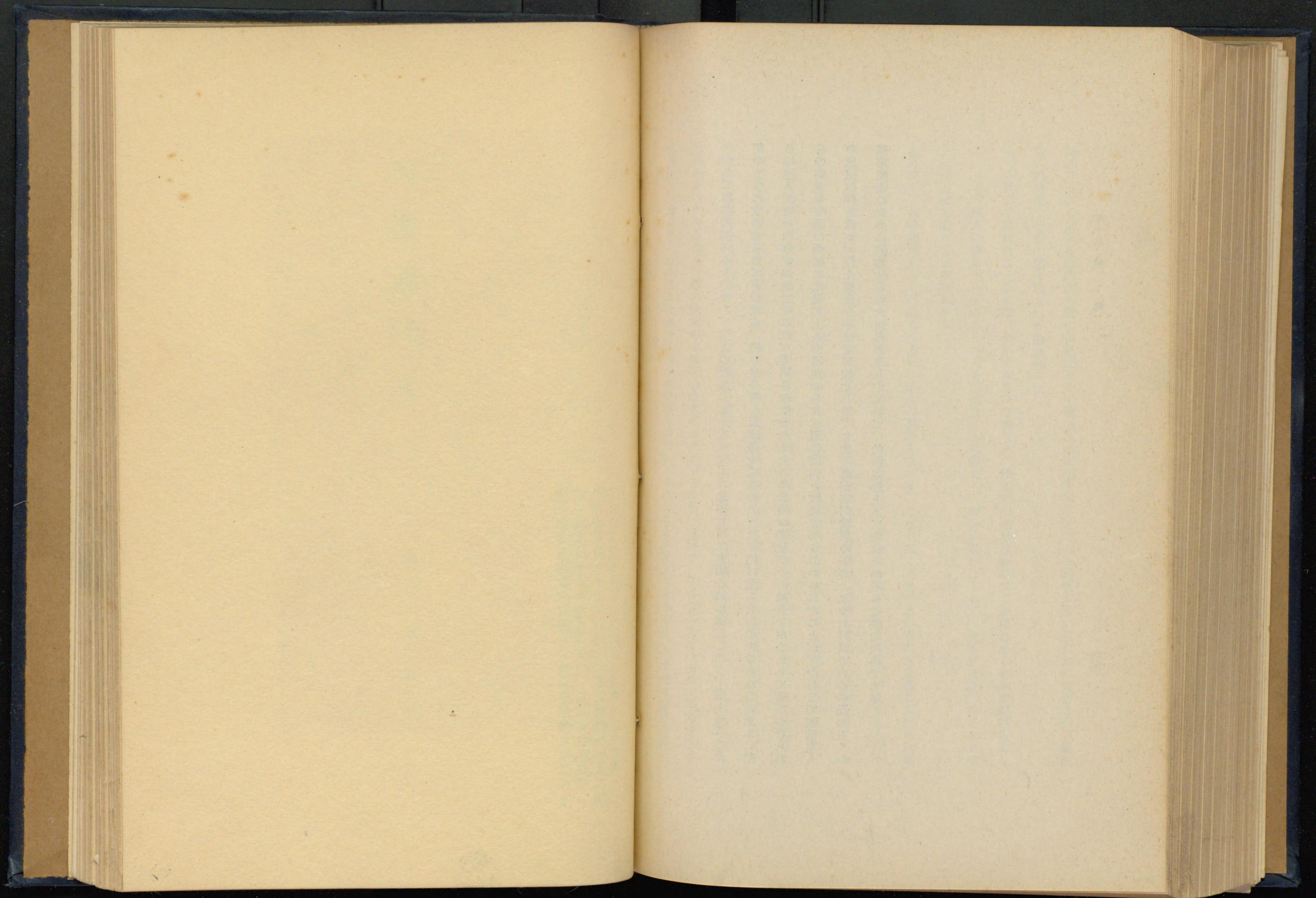
覺如上人の選述せられた御傳鈔はその奥書に「右縁起畫圖の志、ひとへに知恩報德のためなり」といつて居られるやうに、上人御自身の信仰の上から親鸞聖人の恩德を謝し、その聖人の信仰を永く後代の門流に傳へんとせられたものである。それで聖人の行狀を記すうへにも、その全文の中に「聖人の高德を歎ずるもの」「聖人の信仰教義を述るもの」「聖人御一生の事蹟を記すもの」と云ふ此三つの意を合採して選述せられたものである。即ちそれは親鸞聖人の廟堂崇敬を中心として聖人の信仰を永く後代まで傳へやうとして、此御傳鈔にその意を含めて記されたものである。大谷の聖人廟堂は諸國散在の門弟教團の合力によつて造立せられたものであるから、その教義信仰の上に於ても、此廟堂を中心として統一することは、聖人の徹底した眞信仰の思想を永く後代に傳へるうへに最も重要なものであつた、それで若し聖人の滅後その門弟等の總意による此聖人廟堂が造立せられなかつたならば、聖人の教化によつて成立した教團は年代を経るに隨つて衰へ、後世に至つてその門流は煙滅に歸したのであらう。よしやその門流が減びなかつたとするも、今日のやうな宗門の發展を見ることはできなかつたであらうと思ふ。それは聖人は自己が中心となつてその教團を指導しやうといふやうな意思がなかつたからである。

師法然上人の滅後その門流の間には新義をたて師上人の教義を誤るところの異流が多く生じたのであるが、親鸞聖人歸洛後、その門弟に送られた消息の中に

世かくれなきことなれば、きかされたまひて候らん、浄土宗の義みなかはりておはしましあふて候ひとくも、聖人の御弟子にてさふらへども、やうく義をも、いひかなへなどして、身もまどひ、ひともまどはしあふてさうらふめり

と云つて、當時法然上人の門流中にもいろ／＼の異義を立て、それを説く人々のあつたことを報じて居られるのである、しかしまた「故聖人の御をしへをよく／＼うけたまはりて、おはしますひとくは、いまもとのやうにかはらせたまふことさうらはず」とあつて法然上人の教化のままを眞面目に信仰して別に一家を成すやうな野心もない門弟も尙多くあつた、そういう人々の教化は法然上人教化のままを説く最も一般的なものであつて、それ等の教團はその中心人物の滅後に於てその統一を闕き、年れ共に滅んでしまつたのであるが、別に異議を立てて、それを浄土宗の正統と稱し、みづから浄土門流の第二祖をもつて任じ、その教團を統治しやうとした人々の門流のみが後世の浄土宗としてその教團を存続せしめたのであつた、親鸞聖人も法然上人門下に於ける熱烈な信徒であつて自己が立教開宗の祖師となるなど思ひもよらざることであつた、聖人御一生の念佛生活は法然上人の遺訓を確守しやうとせられたもので、一寺一坊を造立せられることもなく、自行化他の念佛弘通は何人が中心

となつて、教化するとも更に貪着せられるものではなかつた。そう云ふ念佛弘通は次から次へと念佛が流布するに任せるものであるから、終に無数の小教團が生ずるのみで、その統一を闕き、その中心人物の滅後、年代を経るにつれて自然消滅するものであ、聖人の教化によつて成立した念佛教團は東國各地に散在したが、若し聖人の思想のままに放任せられてあつたら、恐くは今日の所謂浄土眞宗のやうな宗門は遺らなかつたであらうと思ふ。然るに聖人滅後その廟堂が造立せられ、東國各地に散在した各小教團の崇敬がその廟堂を中心として結びつけられ、その廟堂留守職の系統には覺如上人が出現せられ、祖徳讃仰と教義宣布に努められたことが、今日まで親鸞聖人の思想信仰を傳へ、浄土眞宗の一流を存続せしめ、またそれが宗門發展の基礎となつた所以である。覺如上人の眞宗興隆のために選述せられた幾多の聖教中に於て、此御傳鈔上下二卷はその最も重要な聖典である。



聖典講讀全集第四回配本・昭和拾年參月拾參日印
刷・昭和拾年參月二十日發行・編輯者宇野圓空・
發行者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎
印刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・
發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎